
流星のロックマン4-絆-

亜種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4 - 絆 -

【Nコード】

N1565P

【作者名】

亜種

【あらすじ】

地球を3度も救ったスバル。あれから約2ヶ月後…6年生になったスバルにまた戦いが始まる。

プロローグ

プロローグ

- 謎の場所 -

「おい、アレは進んでいるか。」

「ハイ順調です。」

「そうか…後少しだ…アレが完成すると、地球は私の物に…クック
ツクツ」

スバルは知らなかった…

この後とんでもない事になるなんて…

この後スバルはいろいろな事があるだろう…

恋…出逢い…戦い…そして、別れ…

スバルの運命は誰にも変えれない…

はたしてスバルに未来はあるのか…

（主なキャラクター）

・星河スバル（ロックマン） ・ウォーロック ・星河茜 ・星河大吾 ・響ミソラ（ハープ・ノート） ・ハープ ・白金ルナ朝…

『早く起きろスバル！』

「うゝん。おはよう、ウォーロック」

そして、着替えにいった。「（やけにすんなり起きるな…）」

そう思うウォーロックだった。

そして、スバルについて行くように階段を降りた。

スバルがイスに座ると、ウォーロックが聞いた。

『一体どうしやがったんだスバル？やけに嬉しそうだな』

「今日は転校生が来るらしいよ！しかも3人だよ！」

スバルは嬉しそうに言った。そして、

「行つて来ます！」

と言つて扉を開けた。すると、

「「「おはよう（ございます）、スバル（君）」「「「おはようみんな」

ルナ、キザマロ、ゴン太が挨拶した。

「さ、早く学校へ行つて転校生を迎える準備をするわよ！」

そう言つてスバル達は学校へ行つた。

・ウェーブロード・

そこにはギターを背負つた女の子の電波体がいた。

「久しぶりだねスバル君！また会えてうれしいよ！しかし驚くだろうなースバル君」

スバルを見ながら言つた。さらに、その子は学校へ行つた。

つづく

衝撃の転校生

「学校」

「転校生誰だろうね。」

「可愛い女の子がいいな。」

クラスは転校生の話でもちきりだ。

「おーいみんな席に着け。」

先生が言つと、みんな待つてましたと言つようにすぐに席に着いた。

「よし、一人ずつ入つてこい。」

すると、見覚えのある人が入つて来た。スバルは思い出し、

「ツカサ君!!」

そう、その少年は前に同じクラスだったツカサだった。

「よし、自己紹介は後にして次入つて来い」

すると、また見覚えのある少年が入って来た。スバルは思い出し、

「ジャック!!」

そう、二人目はついこの間までいたジャックだった。

「よし、最後だ。入って来い。」

すると、クラス中衝撃だった。

「『ミソラちゃん』」

クラス中八モった。さらに、パニックになった。すると先生が

「みんな落ち着け。じゃあ軽く自己紹介しろ。」

そう言うツカサから始めた。

「はじめましてと久しぶり!前に同じクラスだった人も初めての人
もヨロシク。」

「はじめまして…ジャックだ…ヨロシク。」

「はじめましてかな?とにかくヨロシク。」

3人とも自己紹介が終わると、先生が席はどこがいいか聞いた。

ツカサとジャックはどこでもいいと言った。

しかしミソラだけは違った。

「私スバル君の隣がいいです!」

すると、クラスの男子＋ルナが殺気を出しながら視線を向けた。

「（なにこの殺気は…）」
とスバルは少しビビっていた。

すると、ミソラがスバルの隣の席へ行き座った。

「久しぶりだねスバル君　ヨロシク」

笑顔で言われて少し元気が出たスバルだった。

この後始業式が終わった後にスバルが質問責めだったのは言うまでもない…

つづく

衝撃の転校生（後書き）

どうでしたか？

「なんかセリフ少くない？」

おやこれはスバル君。大丈夫です次回は多いから。

「頼むよ！」

ハイ！

感想待ってます！

波乱の昼休み

昼休み - 屋上 -

「でも転校生がツカサ君とジャックとミソラちゃんだったなんてビックリだよ！連絡くらいくれても良かったのに。」

『そうだぞ！それにハープはうるさいし『誰がうるさいって！！』
げっ！ハープ！』

ウォーロックはとても驚いていた。

『ハイ、アンタはこっち！』

そう言ってウォーロックは何処かへ連れ去られた。

『助けてくれ〜〜〜〜スバル〜〜〜〜』

しかしスバルは助けなかった。

しばらく沈黙が続いた…

沈黙を破ったのはミソラだった。

「あ…あのね…」

「？」

するとミソラの顔が少し赤くなった。

「わ…私…スバル君の事が…」

ドカーン

「何っ！」「何があつたのハープ！」

いつの間にかハープもウォーロックも戻っていた。

『公園で電波体が暴れてやがる！しかも1体じゃねえ！！100体はいるぞ！！！』

「「そんなにいるの！」」

するとハープが、

『しかも普通のウイルスより少し手強いわよ！！』

そしてハンターV.Gが鳴った。

『サテラポリス及び遊撃隊につぐ。コダマタウンの公園にてウイルス発生！直ちに現場に迎え！』

「いくよウォーロック！電波変換だ！」

『久しぶりに腕がなるぜ』

ウォーロックはとても喜んでいた。

『私達も電波変換よ!』

「いいよハープ!」

「「電波変換!」!」

「トランスコード シューティングスター・ロックマン!」

「トランスコード ハープ・ノート!」

そしてロックマンとハープ・ノートになった。

「いくよ!ハープ・ノート!」

「うん。ロックマン!」

この時ハープ・ノートは何故か嬉しそうだった。

(久しぶりにロックマン見たな〜やっぱかつこいい!)(

そう思うハープ・ノートであった。

- 公園 -

公園に着いた二人。辺り一面メットンだった。

「ねえロックマン、いつもと少し違うと思うけど……」
確かにヘルメットの色が黄色ではなく、紫だった。

「そうだけど今はウイルスを倒そう!」

数分後ウイルスは全てデリートされた。二人は電波変換を解きいた。

「やったね、スバル君」

「そうだね!じゃあ戻ろう!」

そして二人は学校へ戻った。

つづく

波乱の昼休み（後書き）

どうでしたか？バトルの部分は今回は省略しました。次回からは必ず書きます。感想待ってます！

ええええええええ！！！！

・下校中・

「へーそうだったんだ。呼んだら良かったのに。」

ツカサが少し残念そうに言った。

「じゃあサヨナラー」ツカサは帰った。

「そういえばミソラちゃん家何処なの？」

「そうよ、結構遠いんじゃない？」

「大丈夫だよ！だってここだもん」

そう言って指したのはスバルの家だった。

「「「「「え〜〜〜〜〜〜」」」」」

周辺に驚きの声が響き渡った。

「「どういう事だ（ですか）スバル（君）！！」」

「知らないよ！僕だって今知ったばかりなんだから！

「お母さんから聞いて無かったの？」

「聞いて無かったよ！！」

すると後ろの方から二人をしのご怒りと殺気があった。

スバルは恐る恐る後ろを向いた。

「スバル君！！！」

「ヒィィィィ」

するとスバルはミソラの腕を掴んだ。

「えっ！」

ミソラの顔が少し赤くなった。

「逃げるよ！ミソラちゃん！」

「うん！！！」

そして二人は家帰った。

「待ちなさ～～～い！！！」

その後、ルナはずっと機嫌が悪かったらしい…

つづく

ええええええええ！！！！（後書き）

次回は恋愛です。

感想待ってます！

家族

- スバルの家 -

ボタン！！

そこには息を切らしたスバルとミソラがいた。

「ハアハアハア、なんとか逃げれた。」

「ハアハアハア、ス…スバル君…そろそろ腕離して…」

ミソラが少し赤くなり言った。そしてスバルも少し赤くなり、

「う…ごめん…」

そしてスバルは腕を離した。

すると茜がやって来て、

「お帰りなさいスバル、ミソラ。あらあら、二人とも赤くなって。」

なにかしたの二人とも。」

そう言うとスバルとミソラはさらに真っ赤になって、

「「な…何もしてないよ（ません）！！」」

と、二人は見事にハモった。

「あっ！」

ハモったので、二人は顔合わせた。

すると茜が、

「そんな事よりちゃんと挨拶しなさい。」

何事も無かったように言った。

「わかったよ！ただいま、母さん。」

「お邪魔します、スバル君のお母さん。」

すると茜が、

「ミソラちゃん！」「お邪魔します」「じゃなくて」「ただいま」でしょ。」

「えっ！」

「そうだよ！ここはミソラちゃんの家で、家族なんだから！」

そう言つと、ミソラが突然、

「うっ、うっ、うっ」

と泣き出した。するとスバルは慌てて、

「ど、どうしたの！」

「だって、家族って言ってくれたのが嬉しくて。」

そう言つと、茜が、

「そっか、ミソラちゃんは家族を亡くしたんだったわね。じゃあミソラちゃん。これから私の事を「お母さん」と言いなさい。私も「ミソラ」と言つから。」

そう言つとミソラは泣きやみ少し照れながら、

「はい、お、お母さん。」

「はいミソラ。ミソラはスバルとスバルの部屋へ行って。夕飯の用意するから。」

「はい」

そして二人はスバルの部屋へ向かった。

つづく

家族（後書き）

やっと夕方だ…

前回に、「次回は恋愛」と言っていました。がそれは次回です。すいません！
感想待ってます！

告白

- スバルの部屋 -

「へー、これがスバル君の部屋かー。やっぱり宇宙の本が多いね！」

「あんまり散らかさないでね。」

『もう遅いぜスバル。』

ウォーロックがそう言ったので、スバルが振り向くと、ミソラが散らかしていた。

「ミソラちゃん！」

少し怒った声で言うと、

「ごめんね（涙目）」

当然涙目は演技だった。

「（うつ）わかったよ。そういえば屋上でなにか言いかけたね、僕の事がどうたらって。」

するとミソラは少し赤くなって言った。

「スバル君はシーサイランドの時の夜の事覚えてる？」

するとスバルも少し赤くなり、

「うん！覚えているよ。ミソラちゃんと手を繋いだね。」

そう言うミソラは少し照れながら聞いた。

「その時嬉しかった？」

「う、うん！嬉しかったよ！」

「良かった！」

「？」

するとミソラは真っ赤になって、

「わ、私スバル君の事が好きです！付きあって下さい！」

「えっ！」

スバルも真っ赤になった。そしてしばらくすると、

「ぼ、僕もミソラちゃんの事が好きでした！付きあって下さい！」

すると二人とも笑顔になり、

「「喜んで！！！」」

するとミソラがスバルに抱きついた。

「やった〜！嬉しい！」

当然スバルは真っ赤になった。

「なっ、何するのミソラちゃん！」

「いいじゃん！カップルなんだから」

そう言ってミソラはさらに強く抱きしめた。

「じゃあキスしてスバル君」

「なんで!」

「駄目:(涙目+上目遣い)」

「(うつ)でもねー」

ミソラの演技に弱いスバルだった。

「おねが…んっ」

その時ミソラの唇にスバルの唇が重なった。

スバルは少し照れながら、

「今日だけだよ!」

するとミソラは笑顔になって、

「スバル君大好き」

と言ってまたスバルに抱きついた。すると、下から

「スバル〜ミソラ〜ご飯よ〜」

と聞こえたので、

「ほら、離して。」

と言われたので、ミソラは頬を膨らまし、仕方なく離れた。

少し残念そうだったので、スバルは

「また夕飯が終わったらしいから。」

と言うと、ミソラは笑顔になって、

「うん!」

とうなずくと、二人は階段を降りた。

つつく

告白（後書き）

やっと告白した。最近アイデアがどんどん出てくる。感想待ってます！

「二人ともやめなさい！」

用意が終わったミソラが言った。

すると二人はしぶしぶハンターV.Gに戻った。

「さあ食べましょう。」

と茜が、言った。

「「「いただきます!」「」」

しばらくすると、大吾が帰って来た。

「ただいま〜早く飯食べよ」

そして、大吾も食べ始めた。

「そういえばミソラちゃんはどこに寝るの?」

スバルが聞いた。するとミソラは、

「スバル君の部屋だよ!」
ブーーーー

スバルは驚いてお茶を吹いた。

「きゃー、スバル君汚い！」

「だっ、だって普通ビツクリするでしょ。」

「なんで？」

「別にいいじゃないスバル。」

「母さんまで！」

スバルがやめてと言おうと思ったがやめた。なぜなら大吾が加勢したからだ。

「さすがにそれはまずいだろ茜。」

「ふふふ、あのね…」茜が、大吾に耳打ちした。

「ふゝんそうゆう事か。いいぞ、スバルの部屋で寝て。」

「父さんまで〜」

「そうと決まればミソラの荷物はスバルの部屋に置いておくわよ。」

「ハイ、ありがとうございます。」

この後スバルはテンションが下がったまま夕飯を食べた…

う
う
う
う

ええええええええええ！！！！2（後書き）

今回のテーマは喧嘩と仲直りです。感想待ってます！

喧嘩するほど仲がいい

夕飯を食べ終わり、片付けをしていた。

玄関ではスバルがどこかへ行く準備をしていた。

「じゃあ展望台へ行ってくるよ母さん。」

するとスバルはミソラの視線に気づき、

「ミソラちゃんも行く？」

「うん！行く」

と言ってスバルについていった。

扉を開けると、ツカサがいた。

「あつ、ツカサ君。何してるの？」

「あつ、スバル君。僕は散歩だよ。スバル君は何処かへ行くの？」

スバルは展望台へ行くと言おうとしたが、

「デートだよ」

と、ミソラがスバルの腕に抱きつき言った。

「そう、邪魔しちゃ悪いね。また明日。」

「あつ、ちよつと。」

もうツカサはいなかった。

「もう、なんて事言うんだよミソラちゃん!」

「いいじゃない スバル君は私の事嫌い?」(涙目+上目遣い)

「(うつ) すつ、好きだよ。ミソラちゃんの事」

「じゃあいいでしょ」

そう言って二人は展望台へ行った。

- 展望台 -

「スバル君！ねえスバル君てば！」

ミソラが呼んでいるが、スバルは星を眺めていた。

「もういい！帰る！」

そう言っただけで帰ろうとした。すると、

「あれ、ミソラちゃん帰るの？」

スバルは今頃話した。

「ス…」

「ス？」

「スバル君のバカ！スバル君はずっと星を見ていればいいんだ！」
そう言っただけでミソラは帰ろうとした。

「待ってよ！」

スバルはミソラの肩を掴んだ。

「離してよ！」

ミソラが振り払おうとすると、スバルはミソラを抱きしめた。今までより強く。

「えっ」

「ごめんミソラちゃん。僕星を見てるとついぼーっとしてしまうん

だ。でもミソラちゃんの声聞こえているよ。だからごめん…」

スバルはミソラの機嫌を直すのに必死だった。

「（スバル君…）いいよ。」

「良かった」

「でもただじゃ許さないよ！」

「（嫌な予感）なっ、何？」

「キスして…」

「えー」

「しないと許さないよ！」

「えー」

「いい…んっ」

スバルはミソラにキスをした。今回は数分間…

そしてやめた。

「今回は特別だよ！今日だけなんだから。」

「（スバル君…）ありがとう。」

「さあ帰ろうか。」

「うん」

そして二人は帰った。

手を繋いで…

つづく

謎のメール

・スバルの家・

「「ただいま」」

「お帰りなさい二人とも。あら、二人とも顔が赤いわよ。」

茜がそう言つと、二人は逃げるように部屋へ向かった。

・スバルの部屋・

『お帰りミソラ。あら何かあつたの二人とも。』

「「なつ、何もないよ（わよ）。」」

すると、スバルは

「そついえばロックはどこにいたの？」

ウォーロックは苦しそうに、

『ハーブに拉致された。』

そつ言つとスバルはため息をついた。すると、

『そつ言つお前らは何してたんだよ！なんかおかしいぞ』

すると二人は動揺した。しかしミソラは諦めたのか、全て話した。

『へー、スバルもやるじゃねえか。』

『すごいわね。スバル君。』

その時二人は真っ赤になっていた。

『ホント、ガサツな誰かさんとは大違いね。』

『んだとぉー』

「喧嘩は外でやってねロツク。」

「ハープもよ」

すると二人（2体？）は外へ行った。

「さて、風呂に入ろうつと。」

スバルは風呂へ行こうとすると、ミソラが抱きつき、止められた。

「待つてよーもう少し話そうよー」

「なんで！」

「もう少し一緒にいたいの！」

「えっ…わかつたいいよ。」

と断れないスバルだった。

「ねえ、そろそろ離してよ。」

「いいじゃん！」

「まあいいけど、ミソラちゃんだから」

「嬉しい〜 大好き」

と、抵抗しなくなってきたスバルだった。

）

メールが届いた。スバルはメールを見た。

・スバル君、いえロックマン。いまずぐ展望台へ一人で来て。ウオ
ーロックはいいよ。 ハデス・

「（ハデス？誰だろう？とにかく行ってみよう。）」

「どうしたのスバル君？」

「なんでもないよ。ちょっと下に行くね。」

と言って下へ降りた。

そしてスバルは展望台へ行った。

「ロックいる？」

『ああ、いるぜ。展望台へ行くんだろ。いいのかミソラに黙って行

つて。
』

「仕方ないだろ。一人で来いって書いてあったんだから。それにミソラちゃんを危険にしたくない。」

そう言ってスバルは展望台へ行った。

- 展望台 -

「来たわね。スバル。」

少女は呟いた。

つづく

謎のメール（後書き）

次回この物語の鍵を握るキャラが出ます。感想待ってます！

謎の少女

- 展望台 -

「ハアハアハア、どこだ。」

展望台に到着したスバル。辺りを見渡すがどこにもいない。

『スバル！ビジライザーをかけてフェンスを見る！』

スバルはビジライザーをかけてフェンスを見た。するとそこには女の子の電波体がいた。

「誰だ？」

その電波体は体は白く、銀色の翼があり、顔は白いヘルメットのようなもので覆われてわからなかった。しかし目の部分は透けて見えた。その目は冷酷な目だった。

「よく来たわね、スバル。早く電波変換しなさい。勝負よ！」

『挑むところだ！スバル！いくぞ！』

「うん！トランスコード シューティングスター・ロックマン！」

「行くぞハデス！」

ロックマンはキャノンを撃った。しかしハデスは読んでいたようにかわし、ロックマンの方を見た。

「いない！」

「後ろだ！」

「何！」

「ワイドソード！」

ロックマンはハデスを切った。

「ぐっ！」

『楽勝！』

「甘い！」

ハデスは隙をついてロックマンを蹴った。

「うわっ」

しかしハデスはさらに攻撃した。

「キャノン+マヒプラス、マッドバルカン3、レーザーミサイル！」

「うわーーー」

その後もハデスは攻撃を続けた。

一方ミソラ・

「スバル君なんか怪しいなー。」

するとハープが

『ミソラ！今展望台でスバル君が闘っているわよ！しかも今やられてピンチよ！』

「えっ！」

ミソラは驚き、不安になった。

「ハープ！私達も行くよ！」

『ええ！』

「トランスコード　ハープ・ノート！」

ミソラはハーブ・ノートに変身すると、展望台へ向かった。

- 展望台 -

その頃ロックマンはピンチだった。すると、

「結構強いね。なんとかいけるかな？」

「なんの事だ！」

すると、

「ロックマン！」

「ハーブ・ノート！」

ミソラはロックマンに駆け寄った。

「大丈夫？それよりあいつは誰？」

するとハデスが

「スバル覚えてないの？」そしてハデスは電波変換を解いた。そこには銀色の長髪で青いワンピースを着た可愛らしい少女がいた。

「あつ、君は！」

スバルは驚いた！

「久しぶり！スバル！」

「ラ、ライト！」

スバルはそう呼んだ。

つづく

謎の少女（後書き）

どうでした？次回はライトの事が少し明らかになります。感想待ってます！

正体・嫉妬・一緒

「ライト！」

スバルが呼んだ。

「やっと思い出してくれた、スバル。」

「なんでライトが電波変換出来るの。」

「まあ、色々あったの。今は言えないけど。」

「ふーんそうなんだ。でも本当に久しぶりだね！5年ぶりかな？」

「それくらいたったんだ。それにしてもスバルはかっこよくなったね。」

久しぶりの再会に喜んでいると、スバルは後ろに殺気を感じた。

恐る恐る振り向くと、黒いオーラを出したミソラがいた。

「ス〜バル〜君！」

「（怖い。）ごめんミソラちゃん！」

「今回は許さないよー！」

「えー」

そんな二人を見ていると、ライトはこう思った。

「（へー、二人はそうゆう仲なんだ。やるねスバル。）」

と二人の関係を知ったライトだった。

「じゃあ帰るね。なんだか邪魔みたいだし。さよならスバル。」

と言って何処かへ消えたライトだった。

「さよならライト。」

「さあ僕達も帰ろう。続きは僕の部屋でしょう。」

そう言って二人は帰った。

- スバルの部屋 -

「ごめんミソラちゃん！」

土下座をして謝っているスバル。するとミソラが口を開いた。

「スバル君！」

「ハイ！」

「心配したじゃない。」

「えっ？」

ミソラが言った事が以外で少し驚いたスバル。

「私…スバル君が居なくなったらって思ったのよ！また大切な人が居なくなったらって…」

「ミソラちゃん…」

ミソラは泣き崩れた。

「それになんでライトって子に呼び捨てで呼んで私はちゃんづけなの！私…また孤独になるのは嫌だよ！」

するとスバルはミソラを優しく抱いた。

「ごめんねミソラちゃん…僕はミソラちゃんを危険にたく無かつ

たんだよ…それにね、ライトとは友達だよ。呼び捨てにする理由はあるんだよ。だからごめんねミソラちゃん…」

そう言うとミソラは泣き止み、スバルを強く抱いた。

「いいよ。こっちこそごめんね…。勝手にやきもちやいてスバルにあたって。」

「なんでミソラちゃんが謝るのさ。僕が悪いのに。」

「これから何処かへ行く時は伝えてね。」

「うん！約束するよ。」

そして二人はさらに強く抱きしめた。

「そんなことより、なんで呼び捨てにするのかの訳を聞かせてよ！」
するとスバルは話し始めた。

「僕はコダマタウンに来る前に秋葉町に住んでいて、ライトとは幼なじみだったんだ。それにライトちゃんって呼んでいたんだ。」

「なんで？」

「そりゃ僕は誰にでも「君」や「ちゃん」をつけるよ。」

「へー。」

ミソラはスバル君は前から礼儀正しいんだなと思った。

「そして引越しの時にライトが今度会う時は二人とも呼び捨てにしようって約束したんだ。」

「ふーん、スバル君にそんな過去があつたんだ。」

安心したように言った。

「じゃあ私も呼び捨てで呼んでよ」

「なんで！」

「いいじゃない、彼女なんだからね」

「学校以外ならね。」

「ヤッター　じゃあ今呼んで」

とミソラが言うと、スバルは照れながら、呼んだ。

「ミ…ミソラ」（小声）

「もっと大きな声で」

「ミソラ」

「もう一回」

「ミソラ！」

「ありがとう」

ミソラはスバルに抱きついた。よほど嬉しかったのか、ベットまで飛んだ。するとミソラが

「んっ…」

スバルにキスした。

「何するの！」

「お・し・お・き」

「ま、いつか。」

- 外 -

『やるな！スバル！』

『ホント、ガサツな誰かさんと大違いね』

『んだと！』

二人はまた喧嘩し始めた。

- スバルの部屋 -

「じゃ、寝よつか。」

その時、ミソラはベットに横になっていた。

「じゃあ布団取ってくるね」

スバルが布団を取りに行こうとすると、ミソラに止められた。

「待って。」

「何？」

「一緒に寝よ スバル君」

「えー！」

「いいじゃん 彼女なんだから 駄目…？」（涙目＋上目遣い）

「（それは反則だよ！）いいよ。」

「じゃ来て。」

そしてスバルはベットへ行った。

・数分後・

「なんで抱きつくの…？」

ミソラはスバルに抱きついていてた。

「って寝てるし！早っ！」

そう言うときスバルも疲れていたのですぐ寝た…

「なんだスバル君もう寝たんだ。それにしてもスバル君の寝顔がっ
こいい！後可愛い！」

そう言ってミソラも寝た…さらに強く抱きついて…

つづく

正体・嫉妬・一緒（後書き）

やっと1日終わった！しかもタイトルめっちゃめっちゃ！感想待ってます！

動き始めた組織

- 土曜日の朝 -

『起きろ！スバル！』

「後10分ムニャ」

「ねえロック君、いつもこうなの？」

少し驚いたようにミソラは聞いた。

『そつだよ！ったく、なんとかなんねえのか！』

イライラしてると、ミソラが何か思いつき手をポン！と打った。

「そつだ！でもねー」

ミソラが少しためらっていると、ハーブが助言した。

『早くしなさいよミソラ！デートに行けなくなるわよ！』

「そつだね よし、するぞー！」

何故か気合いが入っているミソラ。

ミソラはスバルの耳でこう言った。

「ス・バ・ル・君、お・き・て」

しかしスバルは起きない。

「仕方ない、最後の手段を使おう」

何故か嬉しそうなミソラ。

するとミソラはスバルの鼻をつまんでスバルの口をミソラの口で塞いだ。

当然苦しくなりスバルは目が覚めた。

「んっ、んんんんん！」

（訳）な、何するの！

ミソラはキスをやめた。するとウォーロックは、

『今度からスバルを起こすのはミソラに決定だな!』

「私もいいよ。」

「あのく僕の意見は?」

スバルの意見は無視され、決定した。

「スバル君早く朝食食べて。今日はデートなんだから」

数分後、二人は出発した。

- 公園 -

）

電話だ。でると曉だった。

《よおスバル！お、ミソラもいるな！なんだデートか？》

すると二人は真っ赤になった。

《まあいい。それよりデート中悪いがすぐにWAXA本部に来てくれ。》

「わかりました。」

そう言って電話を切った。

「ごめんね、デートは終わってからでいい？」

「いいよ」

そして二人はWAXAへ行った。

- WAXAニホン支部指令室 -

指令室に入ると、曉がいた。

「久しぶりだな！スバル、ミソラ。にしてもあのミソラを彼女にす

るなんてやるなあスバル！」

すると二人は顔が真っ赤になった。

「そんなことより何の用ですか曉さん！」

「ああすまん、まず二人とも最近変なウィルスと闘ったか？」

「ハイ、あります。」

そしてスバルは昨日の事を話した。

「やはりそうか…。」

「何かあったんですか？」

「それは俺から話そう。」

すると指令室に大吾が入って来た。

「実は最近ディーラーを上回る組織を確認したんだ。」

「ディーラーを上回る組織…。」

「組織の名前は分からない…。だが最近そいつらが動き始めた。そ

いつらは「ある物」を探してるらしい…」

「「ある物？」」

二人はハモった。

すると大吾が答えた。

「オーパーツだ！」

「えっ！でも海底に大陸と沈んだはずじゃ…」

驚いた様子のスバル。

「オーパーツは何故か移動した。だから奴らより先に見つけてほしい。」

「わかりました。でも何処にあるんですか」

心配そうに聞くと、

「今はまだだが反応があり次第連絡する。」

「そうですか。じゃあ僕達は帰りますね。」

スバルが帰ろうとすると、

「待ってくれスバル。お前に紹介したい人がある。ミソラもだ。」

二人は振り返った。

「遊撃隊の新しいメンバーだ。」

すると3人入って来た。すると二人は驚いた。

「ツカサ君、ジャック、それにライト（ちゃん）！！」

「仲良くしろよ！以上解散！」

そして解散した。

スバルは遊撃隊の新メンバーに駆けよった。

「ツカサ君電波変換出来るの？」

「うん！」

するとツカサの横にウィザードが現れた。

「『ジエミニー！』」

『違うぜ、俺はヒカルだ。それにツカサはもう二重人格じゃねえぜ。』

「へー、じゃあジェミニ・スパークになるんだ。」

「そうだよ。それよりデートはいいの？」

「あっ！」

スバルが思い出したように言うと、隣に黒いオーラを感じた。

「まさか忘れてたの！」

「こ、ごめん！今から行こ！どこに行きたい？」

するとミソラは許したのか、笑顔で答えた。

「そうだね…ヤシブタウンに行こ」

「いいよ 行こ」

そうして二人はヤシブタウンへ向かった。

「なんかラブラブだな、あの二人。」

笑いながら言う暁だった。

U
U
<U>

動き始めた組織（後書き）

次回はデートです。感想待ってます！

デート中なのに…

・ヤシブタウン・

「さ、買い物に行こ!。」

そうして二人は103デパートに行った。

103デパートに入った時、手を繋いでいたので、視線が痛かったらしい…。

「ねえそろそろ休もうよ…」

「いいじゃん、後少し」

スバルが疲れるのも当然である。なぜなら3時間くらい引っぱられているからだ。

するとスバルはある事を思いついた。

「じゃあ欲しい物ひとつ買ってあげるから休もう。」

「えっ、いいの?ありがとう」

そう言ってミソラはスバルに抱きついた。

「やつ、止めてよ人前で…買ってあげないよ！」

するとミソラは止めた。

その後、スバルはとても高い服を買わされた。

「そろそろお腹すいたね。食べに行こ！」

「賛成」

そう言つて二人はカフェに向かった。

そしてスバルはミソラの注文した量に驚いた。

「そんなに食べて大丈夫？」

「大丈夫だよ 普通だよ」

そして二人は食べ始めた。

「そういえば屋上に星の館が出来たんだって。行こよ！」

「行くの…」

少しためらったミソラ。しかしミソラはこの後のスバルの言葉で了解した。その言葉は、

「一緒に星を見たいんだもん。」

そして二人は屋上へ行った。

・星の館 プラネタリウム・

「きれいだね。ミソラちゃん。」

するとミソラは少し怒りスバルの邪魔をした。

「何するのミソラちゃん！」

「昨日の約束忘れたの！」

「（あつ、忘れてた）止めて、ミソラ…」

「ありがとう、スバル」
「えっ！」

スバルは真っ赤になった。

「なんかスバルだけ可哀想と思って…。だからこれからは二人とも呼び捨てだよ」

そして二人はプラネタリウムの夜空を見た。

手を繋いで…

楽しそうにしてると、突然プラネタリウムが変な音を出した。

「何があつたのロック！」

「わからねえ！とにかくプラネタリウムの電脳に行くぞ！」

『ミソラもよ！』

そして二人は電波変換して、プラネタリウムの電脳へ行つた。

・プラネタリウムの電脳・

二人は電脳に入ると、奥にはなんとあの電波体がいた。

「『ハープ・ノート!』」

そこにはもう一人ハープ・ノートがいた。しかしそのハープは青かった。

「私の姿でするなんて許さない!」

そう言ってハープ・ノートは攻撃しようとすると、青いハープ・ノートがとても早く音符攻撃をした。

「危ない!」

そう言ってハープ・ノートをかばいロックマンが音符攻撃を受けた。

「うわっ!」

「ロックマン!」

そしてロックマンは少しよろけた。

【かばったのか。何故あんな奴をかばう!】

「うるさい!それよりお前は誰だ!」

【いいだろう…我が名はハープ・ノート…新生・WWWによって

生み出された…!】

「新生・WWW?」

【もついいだろう…では貴様らを殺す!】

すると、音符攻撃をしてきた。

「オーラ、ワイドソード、ミニグレネード!」

ロックマンの体がオーラに包まれた。ハープ・ノート の攻撃はかき消され、ロックマンの攻撃は全体的中した。

するとハープ・ノート は笑った。

【なかなかやるな…だがこれならどうだ!】

するとハープ・ノート は黒い物を放出した。

するとハープ・ノートはその場に崩れた。

「どうしたの!ハープ・ノート!」

「なんか苦しい…多分ノイズだ…」

するとロックマンは手元を見ると、驚いた。

「ノイズ率1000%!!」

しかしロックマンは

「ファイナライズ！ブラック・エース！」

そしてロックマンはブラック・エースに変身した。

【なんだその姿は…】

「ブラック・エンド…」

すると黒い球体にハーブ・ノートは吸い込まれた。するとロックマンの腕に赤いでかいソードが現れた。

「ギャラクシー！」

【うわぁーーーーー!!】

そしてハーブ・ノートはデリートされた。

そしてロックマンは変身を解いた。

二人はウェーブアウトした。

「ごめんねスバル、私足引っ張って…」

ミソラは泣いた。そのミソラをスバルは手を繋いだ…

「全然足引っ張ってないよミソラ…だから泣かないで…」

そして二人は^{プラネタリアウムの}星空を見ながらキスをした。

そして家に帰り、夕飯を食べ風呂に入り部屋へ行った。

「今日は疲れたねスバル」

「そうだね、明日一緒にWAXAへ行こ！」

「じゃ寝よスバル」

「また一緒…」

「いいじゃん 駄目…」（涙目＋上目遣い）

するとスバルは諦め、

「いいよ」

と言い、一緒に寝た。

しかし今回はスバルからミソラを抱きしめた。

だから今度はミソラが真っ赤になった。のでなかなかミソラは寝れなかったらしい…

つづく

デート中なのに…（後書き）

スバルキャラ崩壊してる…次回お楽しみに！感想待ってます！

波乱の朝

- 朝 -

今日は珍しくスバルが先に起きた。スバルは起き上がろうとしたが、ミソラが抱きついていて為出来なかった。

スバルはゆっくりとミソラの手をどかして着替えた。

着替え終わると、ミソラを見た。

「（ミソラ寝顔可愛い…）」

そう思っで見惚れていたスバル…

「もっと近くで見よ…」

そしてスバルはまた布団に入りミソラを抱きしめた。ミソラの顔をスバルの胸に寄せるように抱きしめた。するとスバルは寝てしまった。

- 数分後 -

今度はミソラが起きた。

目を開けると、スバルの胸が見えた。その瞬間ミソラは驚いた。

「（なんでスバル服着替えてるの…）」

するとスバルは目が覚めた。

「しまった寝てしまった。」

するとミソラの視線に気付いた。

すると二人は真っ赤になった。

そして二人は離れた。

「う…うめんミソラ…」

「いいよ。私ホントはとても嬉しいの、スバルに抱かれて…ねえ、もう一回して」

「いいよ」

そして二人は抱き合った。

「そろそろ下へ行こ！今日はWAXAに行くから。」

そして下へ行った。

・リビング・

「ねえスバル、あなたミソラと付きあってるの？」

突然茜に聞かれてスバルは喉をつまらせた。

「な…何言ってるの母さん！付きあってないよ！」

「ミソラは？」

「友達だよお母さん！」

すると茜は少し笑い、どんどん二人を追い詰めた。

「じゃあなんでいつも二人で同じベットで抱き合って寝てるの？」

しかし二人は黙ったので、茜はさらに追い詰めた。

「ミソラはなんでスバルと付き合おうとしたの？」

「優しいし、かつこいい。後いつも助けてくれるから……あっ！」

「やっぱりね！」

茜の策にはまった二人。

この後二人は茜の尋問を逃げるように出発した。

つづく

新たなサーバー

- WAXA -

「おお！どうしたサクサクスバル！サクサク」

暁がうまい棒を食べながら言った。

「実は…」

スバルはこの前の事を話した。

「そうか、新生・WWWか… わかった調べてみよう。しばらく待ってくれ。ヨイリー博士に会ってこい。」

そうして二人は指令室のメインコンピュータに向かった。

- メインコンピュータ -

「久しぶりですヨイリー博士！」

「あら久しぶりスバルちゃん、ミソラちゃん。今日は何の用かしら？」

スバルは話した。

「実は、メテオGがないのにファイナライズが出来たんです。」

「わかったは、調べてみましょう。ちょっと待ってちょうだい。」

- 数分後 -

「スバルちゃん、わかったわよ。」

「で、原因は…」

「実はスバルちゃんのハンターV Gに新たなサーバーがあったわ…それは「ノイズサーバー」よ…」

「ノイズサーバー？」

不思議そうなスバル。

「スバルちゃんはシリウスと闘ったわね。その時にシリウスがサーバーを作ったのよ…」

「そうですか。ありがとうございます。」

そうして二人はサテラポリスへ向かった。

つづく

新たなサーバー（後書き）

今回短くてすいません！感想待っています！

組織の正体

「サテラポリス」

「スバル！わかったぞ。」

「どうだったんですか？」

暁は画面に男の画像を出した。

「WWWは200年ほど前にあった組織だ。その時のボスはDr・ワイリーだ。しかしWWWは壊滅した。」

「何故ですか？」

「光 熱斗によつてだ。知ってるだろ。」

「ハイ、そうなんだ。」

少し感動したスバル。

「しかしワイリーには子孫がいた。」

「子孫……」

「その名はDr・ルーシ、そいつが新生・WWWのボスだろう。だが何故オーパーツを集めるか不明だ。」

「そうですか。ありがとうございました。」

「いや、こちらこそありがとう。」

そう言つて二人はWAXAを後にした。

- 謎の場所 -

「報告します。ハーブ・ノート が死にました。」

「そうか、だがどうでもいい。あれは捨て駒だ。ところでオーバー
ツは見つかったか？」

「すいません、後少しです。」

「そうか、急げ！」

「はっ！」

つづく

組織の正体（後書き）

短くてすいません！感想待ってます！

旅行の行き先と謎の予言

・数日後　教室・

教室にはルナ、ゴン太、キザマロ、ジャック、ツカサ、スバル、ミソラがいた。

「みんな明日からゴールデンウィークよ。だけど普通のゴールデンウィークじゃつまらないからみんなで旅行に行くわよ！」

「やったー！」

みんな喜んでいた。

「この後場所決めるから私の家に集合よ！」

そしてみんなは急いで帰った。

・ルナの家・

そこには一つの机を囲むように座っていた。

「みんな意見を言っ
て。」
するとキザマロは

「僕はシーサーアイランドですね。」

「俺も賛成だ。」

ゴン太とジャックは揃って言った。

「スバル君とミソラちゃんは？」

「私はどこでもいいよ。」

「僕はビーチストリート。」

「あらいいわね。じゃあビーチストリートに決定ね。出発は明日の朝8時、2泊3日よ！遅れないように！」
こうしてみんなは解散した。

- 帰り道 -

「楽しみだねスバル」

「そうだねミソラ」

「ねえ、ゴールデンウィークの最後の日デートに行こ！」

「いいよ。どこがいい？」

「スピカモール」

「いいよ。」

そして二人は帰った。

- スバルの部屋 -

スバルは夢の中で目が覚めた。

「ここは…どこ？」

そこは白い空間だった。

するとスバルの前に黒い人らしき物が見えた。

- もうすぐお前の世界で大変な事が起こる。だが過去から戦士が来るだろう… -

「待って…」

しかし黒い物は消えた。

そしてスバルは夢の中で意識が薄くなった。

つづく

旅行の行き先と謎の予言（後書き）

次回から旅行編です！感想待ってます！

旅行・機内・正体編・

・翌日・

「さあ行くわよ!」

そう言ってみんなは空港へ向かった。

・機内・

席はルナ、キザマロとゴン太、ジャックとツカサ、スバルとミソラだ。

「なんか楽しいね」

そしてスバルの腕に抱きついた。

しばらくすると、ミソラの顔がスバルの肩に乗ってミソラは寝た。

・数分後・

ミソラは起きた。隣を見るとスバルは眠そうだった。

「ごめんスバル、寝ていいよ。」

「ありがとうミソラ」

そしてスバルはミソラの肩に顔を乗せて寝た。

「スバルの寝顔がっこいい」

と思うミソラだった。だからスバルが起きるまでスバルの寝顔を見ていた。

・さらに数分後・

スバルは目が覚めた。時計を見ると、12時だった。

ピンポーン

すると機内食が配られた。それは高級料理のフルコースだったので、みんな嬉しそうに食べた。

ミソラはデザートを8回もおかわりした。それにはみんな驚いた。

こうして飛行機はビーチストリートへ向かった。

・日本WAXA会見室・

そこには長い机に長官、大吾、暁が座っていた。

記者が質問した。

「ロックマンの正体は大吾さんの息子の星河スバル君だと。」

「そうです。」

「では息子に地球を任せる時何か思いましたか？」

「はい。息子に地球を任せるにはとても心配で反対していました。でも俺の息子だから任せました。」

こうしてスバルの知らない間にロックマンの正体が世界中に知らされていた。

旅行・機内・正体編・（後書き）

短っ！感想待ってます！

旅行・自由時間編・

・ビーチストリート・

「さあ着いたわよ。」

ルナがそう言うとみんなは背伸びをした。

「これから自由時間よ。集合は11時、ここへ集合よ。」

そしてバラバラになった。

・スバル、ミソラ・

二人は手を繋いで歩いていた。

「どこ行くミソラ」

「じゃあ買い物しょ」

「えっ！」

スバルが反論する前にミソラに引っ張られた。

・数時間後・

ミソラは「ご機嫌だった、スバルは疲れていた。」

するとスバルはある店を見つけた。

「あそこに行こ！ミソラ」

「なんであるの〜！」

今度は逆にスバルが引つ張った。その店は星だらけの店だった。

「店の中」

「凄いな…」

スバルはずっと望遠鏡を見ていた。

ミソラはつまらなそうだった。

「スバル！」

「何ミソラ？」

「お土産見よう」

「いいよ。」

そうして二人はお土産コーナーへ向かった。

「お土産コーナー」

「父さんと母さんは何にする？」

「これなんかどうスバル。」

「それにしよう。」

二人は順調に選んで行った。するとスバルは

「僕達のも買おう！」

と提案した。

「じゃあこれにしょ お揃いだから。」

ミソラがだしたのは流星に音符があるストラップだった。

「なんか僕達みたいだね。」

そう言って二人は買い、集合場所へ行った。

「なんで腕組むの？」

「いいじゃん」

くっく

旅行・夜の出来事編・

・ホテルロビー・

「みんなチェックインしたわね。じゃあ今から部屋へ行った。

・ルナの部屋・

ルナ以外驚いていた。

「ヤエバリゾートより凄いね。」

スバルは言った。

「じゃあ各部屋に行って5分後に私の部屋に集合よ！」

そして解散した。

・スバルの部屋・

「初めての一人部屋だ！やっとベットで寝れる。」

『ホントだな！』

「そういえばロックク久しぶりだね。」

『ずっとハープの奴に監禁されてた。青春を邪魔するなって。電波

変換する時だけ出れた。』

スバルはずっとウォーロックの愚痴を聞いていた。

「そろそろ行くねロック。」

ウォーロックを無視するようにルナの部屋へ行った。

「じゃあ今から各自昼食を食べてきて。全部無料だから。」

「『無料!!』『』『』『』『』」

ルナ以外驚いた。

みんな改めてルナは大金持ちと実感した。

・レストランラウンジ・

「美味しいねミソラ」

「そうだねスバル」

二人は周りから見ても分かるくらいイチャイチャしていた。

するとミソラが、フォークに肉を刺してスバルの口の前に出した。

「ハイ、あ〜ん」

いつも反対するスバルだったが、今回は素直に食べた。

「スバルおいしい？」

「おいしいよ」

「間接キス出来た」

「そうだねミソラ」

「なんか変だよスバル…」

するとスバルは妙に動揺した。

「だ、大丈夫だよミソラ！」

「ならいいけど…」

少し心配なミソラだった。

- 数時間後 -

「さあ、明日は遊ぶから早く寝るわよ。」

そしてみんな解散した。

- 廊下 -

ミソラは落ち込みながら部屋に向かっていた。

「スバルがいないから寂しいな…」

『だったら…したら?』

ハープがミソラに助言すると、ミソラは明るくなり、
「そうしよう!」

そう言ってミソラはスバルの部屋に行った。

- スバルの部屋 -

コンコン

「ハイ!」

ノックされたので、ドアを開けた。
そこにはミソラがパジャマ姿で立っていた。

「スバル 入っていい?」

「なんで?」

「スバルがいないと寂しいから…」

スバルは仕方なく入れた。

「ねえスバル 明日楽しみだね」

「そうだね そろそろ戻ったら…」

するとミソラが少し怒りながら、

「やだ！一緒に寝たい！いや、一緒に寝る！」

「（仕方ない、ライトから教えてもらったのを使おう…）」

するとスバルはミソラをベットに座らせた。

そしてスバルはミソラを押し倒した。さらに口を塞いで、もう一つの手でミソラの胸を触った。

「（なにをするのスバル！怖いよ…やめて…！）」

しかしスバルはミソラのパジャマの裾に手を掛けた。

「（いや！やめて！スバル嫌い！）」

ミソラの目には涙がこぼれていた。

するとスバルはやめた。

そしてミソラを泣いているのを見て

「早く戻ってミソラ…」

するとミソラはスバルを叩いた。

「スバルの変態！スバルがそんな事するなんて思わなかった！」

スバルが謝ろうとするとミソラが遮った。

「私怖かった…」

そんなミソラを見てスバルはミソラを今までより強く抱きしめ、キスをした。

数分すると、スバルはキスを止め、説明した。

「ごめんミソラ…ライトが断る時はこれしたら絶対断るって言ったから…」

「言い訳は聞きたくない！」

ミソラは怒鳴った。しかしスバルはそれより大きな声で、

「僕の話聞いてくれ！」

するとミソラは黙った。

「こんな事していくうちに僕は悲しかった。だから途中で止めた。ミソラのこんな姿見たくなかった。一緒に寝るから許して。」

ミソラはしばらく黙った。そして、

「わかったわ許してあげる。じつはね、私少し嬉しかった。スバルが平気でしてくれて、彼女だって風に見てくれて。」

「ミソラ…ありがとう!」

そう言ってミソラに飛びついた。

「ちょっと、まだ許した訳じゃないよ!」

するとスバルは離れた。

「何したらいいの?」

ミソラは笑って

「私の言う事なんでもして」

「いいよ。何して欲しい?」

「まずキスして」

「また…」

するとミソラは頬を膨らませ、

「許さないよ!」

「わかりました。どれくらいして欲しい?」

「私がいいと言うまで。」

そうしてスバルはキスをした。

- 10分後 -

「もういいよ」

ミソラは止めて言った。

「じゃあおやすみ！」

スバルはベットへ行こうとするとミソラに止められた。

「一緒に寝るの！」

「わかってるよ」

そうして二人はベットに寝た。

- WAXAメインコンピュータ -

ヨイリー博士がキーボードを打っていた。

「やっと完成したわ。後は渡すだけね……」

画面には5体のウィザードが写っていた。

333

旅行 - 夜の出来事編 - (後書き)

次回旅行編が終わります。感想待ってます！

旅行・喜怒哀楽編・

「朝」

「ふあゝゝ。」

スバルは目が覚めた。今回もスバルが早かった。

「起きてミソラ……」

眠そうなスバル。しかしミソラはなかなか起きないので、スバルはいつもミソラにされている事をした。

「んっ、んんんんん！」

（訳）何するのスバル！

スバルはキスを止めると、ミソラは赤くなって怒った。

「何するのスバル！！」

「いつもの仕返しでも嬉しかったんじゃない？」

するとミソラは黙った。そして、

「確かに嬉しかったよ……」

勝ち誇った顔を見せた。しかしミソラは負けずに言い返した。

「でも私の言う事聞かないといけないよ」

今度は逆にミソラが勝ち誇った顔を見せた。

「わかった、何して欲しい？」

澁々聞くと、ミソラは

「昨日の続きをして」

「ええええええええええ！！！」

とても驚いたスバル。

「嘘だよ」

ミソラが笑顔で言うと、スバルは安心した。

「じゃあ朝食食べに行こ！」

そうして朝食を食べに行った。

今回はみんなで食べたのでスバル以外ミソラの食欲に驚いた。

そして、海へ行つた。

- 海 -

「さあ泳ぐわよ!」

そう言々とみんな海へ行った。

この頃ウィザード達は砂浜でビーチバレーで遊んでいた。

- 数時間後 -

「楽しかった!」

スバルが言々とみんなうなずいた。

- さらに数時間後 -

みんなはホテルにいた。

そして解散した。

- スバルの部屋 -

「今日は疲れた〜！」

『確かに今日は疲れたな！』

スバルはハンターV Gを見た。そこにはメールがあった。

「誰だ？」

それはヨイリー博士からだった。

- 遊撃隊のみんなへ

旅行中ごめんねえ。さっそくだけど、旅行が終わったらWAXAに来てちょうだい。渡したい物があるの。-

「なんだろう渡したい物って？」

『何かの武器か？』

「なんでロックはいつもそうなの？」

コンコン

部屋にミソラ、ジャック、ツカサが入って来た。

「メール見た？スバル君。」

ツカサが言うと、みんなうなずいた。

「とりあえず終わったら行こうぜ！」

ジャックの提案にみんな賛成し、解散した。

- 数時間後 -

みんなはルナの部屋で旅行の話をしていた。

ルナが時計を見ると、もう9時だった。

「みんな早く寝なさい。明日出発早いわよ。」

スバルは立ち上がろうとすると、つまずいて倒れそうになった。しかも倒れる先にはミソラが座っていた。

「きゃ！」

「わっ！」

ミソラにスバルが乗った。二人は見つめ合っていた。

しばらくその状態が続いた。

「早くどきなさいスバル君！」

「い、委員長！」

スバルは急いでどいた。

ミソラはつまらなそうだった。

「なんだもう終わりか、もうちょっとあのままが良かった！」

ミソラが言つとルナはさらに怒り、

「あなた達は友達なんだからね！しかも場所を考えなさい！」

するとミソラが笑顔で、

「大丈夫だよ」

スバルは安心したが、

「私達付きあつてるもん」

するとスバルは泣きそうになった。

「（なんて事言つんだミソラ！）」

ルナの周りには黒いオーラがあり、ミソラ以外隠れていた。スバル

も隠れようとする」と、

「スバル君は待ちなさい！」

そうして説教は30分以上続いたらしい…

- 数分後 -

『とんだ災難だったなスバル…』

「ホントだよ！」

ロックが慰めるように言ったので、少し楽になったスバル。

コンコン

ミソラが入って来た。

さっそくスバルはミソラを少し怒った。

「なんであそこであんな事言うの！」

ミソラは泣いた。

「ごめんスバル…ごめんね…」

するとスバルはミソラに言った。

「したいならしてあげるよミソラ…さっきみたいに。」

するとミソラは少し泣き止んで

「じゃあして…」

二人はベットに横になってスバルが上に乗った。

さらに二人は抱きあった。

するとミソラが

「キスして…今までより長く…」

するとスバルはミソラにキスした。

- 数十分後 -

「もういいよスバル」

ミソラは止めて言った。

「そろそろ寝ようか、一緒に」

スバルが提案するとミソラは勿論了解した。

「ねえ、いつも寝る前にキスして」

スバルは少し考え

「いいよ」

こうして二人はキスをして寝た。

- 外 -

『スバル君はやるわね！ミソラ扱い方がわかって来たわね。』

ハーブが嬉しそうに話した。

『俺は可哀想に思うぜ…』

『ガサツなアンタは分からないわよ！』

相変わらず喧嘩していた。

- 翌日機内 -

）

- お客様にもうしあげます。ただ今上空が荒れており、2時間以上遅れます。心からお詫び申し上げます。 -

そして家に帰ったのは8時だった。

二人は夕飯を食べ、風呂に入り部屋へ行った。

- 部屋 -

「ミソラ明日デートに行けなくなってごめんね…また今度行こう！」

「いいよ また行こうね」

二人は笑顔で話していた。

「おやすみミソラ」

「おやすみスバル」

ミソラが口を近づけ、スバルはキスをした。

そうして二人は寝た。

勿論抱き合って。

つづく

旅行・喜怒哀楽編・（後書き）

次回は本格的に話が進み、新生・WWWとバトルが少しあります。
感想待ってます！

新しいPGM

- 翌日の朝 -

「ふぁ〜」

ミソラが起きた。隣にはスバルが寝ている。

ミソラは時計を見た。すると8時だった。ミソラは急いでスバルを起こした。

「スバル！起きて！」

スバルは起きた。スバルも時計を見て驚いた。

二人は急いで朝食を食べ出発した。

- WAXA -

二人が来ると、ツカサとジャックがいた。

「おせえぞスバル！」

「ごめん！」

「みんな揃ったわね。」

ヨイリー博士が出て来た。

「今からあなた達のハンターV.Gにデータを転送するわ。」

みんなハンターV.Gを見ると、何かダウンロードされていた。

するとスバルは

「シューティング・スターP.G.M（今後SSP.G.M）？」

ミソラが

「ハープP.G.M（今後HP.G.M）？」

ジャックが

「フェニックスP.G.M（今後FP.G.M）？」

ツカサが

「エレキP.G.M（今後EP.G.M）？」

みんな不思議そうに言った。

「今みんなに転送したのは新しいPGMよ」

スバル以外嬉しそうだった。

「ヨイリー博士、僕のエースとジョーカーはどうなったんですか？」

心配そうに聞くと

「それならシドウちゃんに返したわよ。」

スバルは安心した。

「今から説明するわね。まずスバルちゃんのは今までの全ての変身
が出来るわ。」

「『すー！』」

スバルとロックは驚いた。

「ミソラちゃんはバトルカードが使って、攻撃に属性がつくわ。」

「『へー』」

ミソラとハープは啞然としていた。

「ジャック君は雷属性の攻撃が出来るわ。後はミソラちゃんと一緒
よ。」

「『やった!』」

二人は喜んだ。

「ツカサ君はミソラちゃんと同じで、炎属性の攻撃が出来るわ。」

ツカサはあまり驚かなかった。

「後みんなある事をする、究極の変身が出来るわ。スバルちゃん以外はファイナライズが出来るわ。スバルちゃんは分からないわ…」

「分からない?」

「ええ、でも出来るから安心して。で、ある事とは決意と絆よ。まあ自分で見つけてね。」

するとみんな考えだした。

- 数十分後 -

「みんな試してみる?」

そして試しにバトルした。

- 数時間後 -

「「「「「おようなら」「「「「

みんな帰った。

くっく

新しいPGM（後書き）

バトル書けませんでした！すいません！感想待ってます！

オーバーツ搜索と戦い

- 数週間後 -

）

電話がなった。それは曉だった。

《スバルオーバーツを一つ見つけたぞ！場所はナンスカ！種類はダイナソー！》

「わかりました。今から行きます。」

するとミソラが

「私も行きたい！」

《わかった！行ってこい！》

そう言っただけで電話が切れた。

- 数分後 -

そこにはロックマンとハープ・ノートが歩いていた。

「なんで腕を組むの？」

「いいじゃん 彼女なんだから」

「わかったよ（遅れそうだな）」

スバルの予想通り、30分遅れた。

- 基地 -

「見つけたぞ！オーパーツ！さっそく取りに行け！シャドウ、サイクロンを連れて行け！」

「はっ！」

シャドウは研究室に行つて、サイクロンと書かれたカプセルを持ち開けた。

『お呼びですかシャドウ様。』

体が風で紳士みたいなウィザードだ。

「オーパーツを取りに行け！邪魔する奴は消せ」

『了解』

サイクロンは消えた。

・ナンスカ・

「久しぶりに来た！」

スバルは言った。

「スバル来た事あるんだ。」

以外そうにミソラが話すと、

「そっか、ミソラは来た事無いんだ。ム の時に委員長とゴン太と
キザマロと一緒に来たんだ。」

スバルが説明すると、

「いいな、私もスバルと二人で旅行したいな。」

ミソラがうらやましそうに言うと、

「いつか行こう。」

「そうだ……んっ！」

スバルは言った後キスした。

ドーン

遠くで爆発が聞こえた。

「何！」

二人は言った。

『わからねえ！なんか電波体が暴れているぞ！』

ウォーロックが言うと、二人は爆発した所に行った。

- 遺跡 -

二人は電波変換して来ると、そこにはサテラポリスのウィザードが倒れていた。

「なんだこれは…」

『上だスバル！』

驚いたのもつかの間、上を見るとサイクロンがいた。

『ばれましたか。私の名はサイクロン…新生・WWWのウィザードです！』

「またWWWか。何が目的だ！」

『私の目的はオーバーツです。』

「何！」

スバル達は驚いた。

するとサイクロンが

『おやあなた達もオーパーツを探しているのですか。なら邪魔させません!』

サイクロンが襲って来た。

『フォースサイクロン!』

するとサイクロンの周りに四つの竜巻ができ、二人に向かって来た。

「タイフーンダンス!」

ロックマンが竜巻を消すと、さらにロックマンは攻撃した。

「キャノン+マヒプラス、マッドバルカン、ヒートアップ!」

サイクロンは全てくらった。

しかしサイクロンはロックマンの隙をついて、

『フレイムサイクロン!』

炎の竜巻を出した。

ロックマンは竜巻を消したが、その瞬間サイクロンはロックマンに攻撃しようとした。

「サンダーショックノート!」

雷の音符がサイクロンを襲い、体が麻痺した。

ロックマンは

「チャージショット！」

『うわーーーーー！』

するとサイクロンが死に際に、

『お前達と闘って楽しかったぞ…いや、嬉しかった。この気持ちはなんだ？』

するとスバルは笑顔で言った。

「それは絆だよ！僕達は友達だよ！」

『友達か…初めての友達だ…私は死んでも電波として生きている。また会おうきつと力になるだろう…名前は？』

「星河スバル！スバルって呼んで！」

『わかったスバル…オーパーツは奥にある。さようならスバル…』

そう言うとサイクロンは消えた。

「さようならサイクロン……」

こうして二人はダイナソーを見つけた。

つづく

オーパーツ搜索と戦い（後書き）

久しぶりにバトル書いた。感想待ってます！

過去へ出発！！

- 数週間後 -

「スバル！起きて！」

ミソラが必死にスバルを起こさせようとしていた。

「今日はデートに行くんでしょ！」

しかしスバルは起きない。

「もういい！知らない！」

ミソラが怒って部屋を出ようとすると、スバルに手を掴まれた。

「ミソラ…好きだ…」

「えっ！」

ミソラは寝言だったが、嬉しくなった。

「私の夢見てるんだ」

そう言ってミソラはまたスバルを起こそうとした。

今度はキス作戦を使った。

「んんんんんん！！」

スバルは息が苦しくなり、目が覚めた。

「起こすなら普通に起こしてよミソラ！」

顔を赤くしながら言った。

「起きなかったスバルが悪い〜！」ミソラが反論すると、スバルは黙った。

「さ、早く仕度してデートに行こ！」

）

スバルとミソラのハンターV.Gが鳴った。

見るとヨイリー博士からだった。

- スバル（ミソラ）ちゃん悪いけどWAXAに来てちょうだい。 -

メールを見てミソラはがっかりした。

「デート行きたかったな…」

「この用事が終わったら行こう」

スバルが慰めると、ミソラうなずいた。

- WAXAメインコンピュータ -

二人は入って来た。

「何の用事ですか。」

スバルが聞くと、ヨイリーは説明した。

「二人ともクロックマンを覚えてるかしら？」

二人はうなずいた。クロックマンはミソラを過去へ連れて行った奴だ。

「そのクロックマンのタイムスリップ能力が使えるPGMを作ったの。今日は過去へ行ってもらうわ…約200年前に！」

二人は驚いた。

「「なんで？」」

「オーパーツを取りに行ってもらうわ…早くしないとWWWに取られるわよ。」

「「わかりました！」」

するとヨイリーは笑顔になって

「いい返事ね！ちょっと待ってちょうだい。」

- 数分後 -

液体が入ったタンクがあった所にはタイムホールがあった。そして二人は電波変換した。

「いい、チャンスは一回よ！」

「ハイ！」

「じゃあいつてらっしゃい！」

二人はタイムホールに入った。

つづく

過去へ出発！！（後書き）

次回は熱斗とメイルが登場します。感想待ってます！

再会

- 過去（約200年前） -

インターネットに着くと、ロックマン（以後エグゼ）とロールが腕を組んでいた。

「スバル君とミソラちゃん！」

エグゼとロールが驚いていた。

「久しぶりだね！二人とも」

スバルが言うと、ミソラとロールをそっちのけで喋っていた。

するとエグゼが

「熱斗君呼んでくるよ！実は最近熱斗君がインターネットに来れるようになったんだ。」

「メールもよ。」

そう言ってエグゼとロールはプラグアウトした。

「ねえスバル、誰？」

ミソラが聞いてきたので、スバルはあの事件の事を話した。

話し終わると、エグゼとロールがやって来た。

「あれ？熱斗君とロールちゃんは？」

「ああ俺達だよ！」

スバルとミソラは驚いた。

しばらくすると、四人は久しぶりに喋った。

- 数十分後 -

「で、何しに来たの？」

熱斗が聞くと、スバルは答えた。

「探し物だよ！」

「ふーん」「」

熱斗とメイルはハモった。

「ねえ熱斗、私達も探そうよ！」

「そうだな、手伝うよ！」

「ありがとう！」

そうやって四人はオーパーツを探した。

- 犬小屋の電腦（熱斗の家） -

「熱斗、ここにあるの？」

「あるだろう。」

少し心配になる三人だった。

すると奥にベルセルクのオーパーツがあった。

これは四人驚いた。

スバルが取ろうとすると、上から

『それは僕のだよ！』

とカライドマンがいた。

「カライドマン！」

熱斗とメイルは答えた。

しかしカライドマンは着地すると四人に一斉に攻撃され、カライド

マンはデリートされた。

『僕の出番少なくなっ!』

そう言って消え、スバルはオーパーツを回収した。

- 数時間後 -

「じゃあ僕達は帰るよ!」

スバルとミソラはタイムホールの前にいた。

すると熱斗が

「なあスバル、未来では戦いがあるのか?」

スバルはうなずいた。すると熱斗は少し考え、

「俺も未来に行くよ!」

三人は衝撃を受けた。

「でも、いつ戻るか分からないよ!」

スバルは必死に反論した。

「そうだよ熱斗、ここにいてよ!」

メールも反論した。

しかし熱斗は

「いや、行く！」

と言う事を聞かなかった。
するとメールも

「熱斗が行くなら私も行く！」

「メールは残っている！」

「いや！私は熱斗をどこでもサポートするの！」

熱斗は観念して

「わかった一緒に行こう」

そして四人はタイムホールをくぐった。

- WWW基地 -

「ルーシ様。ハープ・ノート、サイクロン、カライドマンが死に
ました。」

「放っておけ！所詮捨て駒だ！」

「分かりました。」

「シャドウ、あれは進んでいるか？」

「少しずつですが」

「まあよからうと急げ！」

「はっ！」

くっく

ウェブライナーの中

- 現在 WAXA -

タイムホールから四人が出て来た。

「それは誰？」

ヨイリーは聞いた。

四人が電波変換とクロスフュージョンを解いた。

そしてスバルは過去の出来事を話した。

「そうなの…わかったわ！スバルちゃんの家に住みなさい。後はこちらでするから。今日は帰って。」

そして四人は帰った。

- ウェブライナー -

「そういえば二人とも6年生になったの？」

「ああそうだぜ！スバルもだろ。」

「そっだよ熱斗君。」

「あつ、熱斗でいいよ。」

一方女子は

「ねえメールちゃん！熱斗君の事が好きなの？」

ひそひそ声で聞いた。

「うん、好き。」

赤くなりながら言った。

「ミソラちゃんはスバル君と付き合ってるんでしょ」

ミソラも赤くなりながら

「うん。あとミソラでいいよ。メールって呼ぶから。」

「わかったミソラ。」

「で、いつ熱斗君に告白するの？」

メールは困った顔をして

「分からない……」

「だったら今日告白しなよ！私もいきなり告白していけたから。」

メールは

「わかった！スバル君の家に挨拶したらする！」

こうしてウェブライナーの中では盛り上がっていた。

つづく

ウェブライナーの中（後書き）

短くてすみません！感想待ってます！

新たなカップル

- スバル家 -

「「ただいま！」」

「「お邪魔します！」」

「お帰りなさい。熱斗、メイル、ただいまでしょ！」

「「ただいま！」」

そして四人はスバルの部屋に行った。

- スバルの部屋 -

「へー、これがスバルの部屋かー、宇宙の本ばっかだな！」

「ホント熱斗と大違い！」

熱斗とメイルは少し喧嘩していた。

するとエグゼが

『止めなよ二人とも！』

エグゼが終わらした。メイルは何かを思い出したのか、

「熱斗！ちよつと来て！」

メイルは熱斗を連れ出した。

「がんばってねメイル！」

「なんで応援したのミソラ？」

「それはね…だから」

スバルは納得し、笑った。

- 展望台 -

「ねえ熱斗私ね、熱斗の事が…」

「俺がなんだよ！」

メイルは赤くなって

「熱斗の事が好き！」

熱斗は驚いた。しばらくしても熱斗は答えを言わなかった。

「どうなの熱斗！」

「わかんねえ。」

「えっ！」

意外な答えで驚いたメール。

「わかった！俺はメールが好きなんだ！だからメールを守ろうとしたんだ。」

『今頃気付いたの熱斗君！』

『鈍感ねえ！』

エグゼとロールにつっこまれた熱斗。

「ありがとう熱斗！」

そう言っでメールは熱斗に抱きついた。

「離せよメール！」

「いいじゃん 彼女なんだから」

展望台では新たなカップルが生まれた。

U
U
U
U

WWの目的

- スバルの家 -

「「ただいま！」」

「お帰りなさい。」

熱斗とメイルは帰ると、スバルの部屋に行った。

- スバルの部屋 -

部屋は甘い雰囲気になっていた。

「離してよミソラ！」

「離せよメイル！」

スバルと熱斗はそれぞれ抱きつかれた。

「いいじゃん スバル」

「彼女なんだから」

二人は離さなかった。

「スバル！ミソラ！熱斗！メール！ご飯よ！」

茜が呼んだので、二人はやっと離れた。

「（母さんナイス！）」

とは反対に、

「（まだしかったな…）」

こうして四人は一階に行った。

・リビング・

夕飯を食べてると、大吾が帰って来た。

「熱斗、メールプレゼントだ。」

そう言って渡されたのは二台のハンターV Gと二枚のカードだった。

「これはクロスフュージョンのカードとハンターV Gだ。PETは持っておけよ。」

そして熱斗とメールはエグゼとロールを転送した。

『居心地いいね!』

『ホント!』

しばらくして再び夕飯を食べた。

夕飯中熱斗は聞いた。

「そういえば俺達どこで寝たらいいんだ。」

「スバルの部屋よ。熱斗とメールと一緒に寝なさい。」

熱斗は驚いて喉をつまらせた。

夕飯を食べ終わると、熱斗はスバルに提案した。

「スバル、ウイルス倒しに行こうぜ!」

「いいよ。ミソラとメールちゃんは。」

二人は首を横に振った。

- ウェーブロード -

「はっ！」

「おりゃ！」

二人は順調に倒して行っ

たとハデスが現れた。

「久しぶりスバル！」

「久しぶりライト！今日は何の用事？」

「言うわ。それより誰？」

ライトが聞くと、スバルは説明した。

- 数分後 -

「へー、この人が私のご先祖様なんだ！」

「「そうなの！」」

スバルと熱斗は驚いた。

「そうよ、私の名前は光　ライトだもん。それより私に付いて来て！熱斗さんも！」

こうしてハデスに付いて行くと、ノイズウェーブの前にいた。

「ライト…どこ行くの?」

「裏インターネット。」

スバルと熱斗は首をかしげた。

「スバルはアポロンがいた所って言ったらわかるかな? 熱斗さんはWWやゴスペルって言ったらわかるかな?」

こう言うと二人は納得した。

そして三人はノイズウェーブに入った。

・ちょうどその頃スバルの部屋・

「がんばってるかな二人とも。」

「がんばってるんじゃない。」

話していると、

『ミソラ！スバル君と熱斗君の前にハデスが現れたわ！』

ハープが言ったので、メイルは聞いた。

「ハデスって？」

「女の子！」

ミソラは怒っていたので、その事しか言わなかった。

「ホント！」

メイルも怒り、

「ハープ！行くよ！」

「ロール！行くよ！」

電波変換とクロスフュージョンをした。

しかし、

『駄目…消えた。』

二人はさらに怒った。

「「どっでー！」」

『展望台で。』

ハープが言うと、二人は展望台へ向かった。

・裏インターネット・

「ねえライト、なんでここなの？」

「ここでしか私のウィザードが出れないから。」

そう言ってライトはウィザードONした。

「『フォルテ!』」

熱斗とエグゼが言った。

『久しぶりだな熱斗、ロックマン（エグゼ）』

「誰？」

スバルは聞いた。

「裏インターネットの支配者よ。」

「へー、そうなんだ。」

「でも俺はフォルテが人間と一緒にいる事が嬉しいな！」

- 数分後 -

「それで二人とも、本題に入るわよ。」

二人は黙った。

「実は新生・WWWが電波テクノロジーを破壊しようとしてるの。」

二人は衝撃を受けた。

「破壊されたら世界が大変な事に……」

スバルは恐れた。

「だから私達で阻止するの。」

しばらく沈黙が続いた。

「今日はメンバーを紹介するね。遊撃隊のみんな、熱斗さん、メイさん、私、そして剣太。」

「「剣太？」」

すると一体の電波体が現れた。

その電波体は体が赤く、右手は赤い剣があった。

「炎山？」

『ブルース？』

「誰？」

「紹介するね、伊集院 剣太 伊集院 炎山の子孫よ。」

「これが炎山の子孫かー！」

熱斗は嬉しそうだった。

「遊撃隊のメンバーは紹介したから。」

「ミソラも？」

「メールも？」

「まだよ。あなた達から言っというて。」

「「わかった！」」

二人はうなずいた。

「今日は解散！早く帰ったほうがいいんじゃない？」

「「あっ！」」

そう言うと二人は大急ぎで帰った。

「面白い。」

ライトは呟いた。

・展望台・

二人は電波変換を解いた。

すると後ろに黒いオーラが二つ感じた。

恐る恐る振り向くと、ミソラとメールがいた。

「スバル〜!」

「熱斗〜!」

「（どうする熱斗!）」

「（あれしかないだろスバル!）」

二人は顔を合わせうなずいた。

「「逃げろ〜〜!」」

二人は叫んで逃げた。

「「待ちなさい!」」

ミソラとメールは追いかけた。

「どこに逃げるスバル!」

「家の僕の部屋!」

そう言ってスバルと熱斗は家に逃げた。

つづく

WWの目的（後書き）

新しいキャラクターが登場しました。ライトは熱斗の子孫だったんですね。感想待ってます！

説教

- スバルの部屋 -

スバルと熱斗は部屋に入り、鍵を閉めた。

「これで大丈夫だろう。」

「そうだなスバル。」

二人は息を切らしながら、安心していた。

- スバルの部屋の前 -

「あつ鍵閉められた。どうしようミソラ！」

「大丈夫だよ 私に任せて！」

- スバルの部屋 -

「これからどうするスバル？」

「しばらくここにいよ熱斗。多分入れないから。」

「そうだなスバル!」

二人は楽しそうに喋っていた。

その会話を壊すようにウォーロックが言った。

『笑ってるのも今の内だぜ二人とも。』

そう言ったすぐ後、

「もう逃がさないよ!」

恐れている声が聞こえた。

振り向くと、電波変換したミソラとメールがいた。

解いて、スバルと熱斗は別々で説教された。

・スバルとミソラ・

「この前行く時私に言っって言ったよね!」

「ごめん!忘れてた。」

必死に謝ってるスバル。

「心配したんだよスバル…」

この言葉でスバルは安心したのか、

「なんでもするからミソラ」

そう言ってスバルはミソラにキスすると、優しく抱きしめた。

「今度は本当に知らせてね スバル」

そう言ってミソラはさらに強く抱きしめた。

- 熱斗とメール -

「なんで女の子と一緒にだったの熱斗！」

「あれはスバルの友達で…」

熱斗が必死に説明していると、

「心配したのよ熱斗！」

メールが熱斗を抱きしめた。

すると熱斗は

「ごめんなメール…心配かけて…なんでも言う事聞くから…」

と言ってさらに強く抱きしめた。

「ホントだよ！じゃあキスして」

「わかった！」

熱斗はメールにキスした。

「ふふっ！」

「何笑ってんだよメール！」

「だって嬉しいんだもん」

こうして四人は仲直りした。

そして長い一日が終わった。

U
U
U
U

朝の出来事

- 翌日 -

ミソラとメイルは目が覚めた。

しかし二人は横になったままだった。

- 昨日の夜 -

「スバル！俺達はどこで寝るんだ？」

「待って布団持ってくるから。」

スバルは布団を取りに行った。

- 数分後 -

スバルは戻って来た。しかしスバルは布団を一人分しか持っていない。

「スバル、なんで一人分？」

「母さんがこんだけしかないから熱斗とメイルちゃんと一緒に寝なさいって。」

「やった！」

「ええ！」

「言う事聞くって言ったよね。」

「わかったよ！」

・回想終了・

と言う訳で熱斗とメール、スバルとミソラは抱き合って寝ていた。

スバルと熱斗は気持ちよさそうに寝ていた。

ミソラとメールは寝顔を見て微笑んだ。

「メール！起こそう！」

「うん！」

二人はスバルと熱斗の体を揺らした。

しかし起きない。

「仕方ない、あれをしよ」

「あれって？」

ミソラはメイルに耳打ちした。

「それいいね！」

メイルは笑った。

二人はそれぞれキスした。

「んんんんん！」

当然スバルと熱斗は起きた。

スバルと熱斗は注意した。

「なにをするの！」

「いいじゃん」

少し喧嘩した。

その後、学校では熱斗とメイルは転校生として紹介された。

う
う
く

それぞれの息子

- 数ヶ月後 -

小学校は夏休みが始まるうとしていた。

そして今いつものメンバーは終業式の最中だった。

そろそろ終わる頃、

）

遊撃隊のメンバーのハンターV.Gが鳴った。

それはヨイリーからのメールだった。

- ごめんねえ今すぐWAXAに来てちょうだい。 -

だから遊撃隊のメンバーは急いでWAXAに向かった。

- WAXA -

そこにはスバル、ミソラ、ジャック、ツカサ、ライト、熱斗、メイ、剣太がいた。

熱斗、メイ、剣太は先日遊撃隊のメンバーになった。

「ごめんねみんな。今日は特別メンバーを紹介するわね。入って来てちょうだい。」

すると一人の少年が入って来た。

その少年は目がエメラルドグリーンで、髪はオレンジ色、青いパーカーを着て流星の形のネックレスをしていた。身長はスバルと同じくらいで、赤いギターを背負っていた。

「自己紹介して。」

ヨイリーは笑顔で言った。

「はじめましてかな？」

「「「「「「「かな？」「」「」「」「」」

一同ハモった。しかし少年は続けた。

「星河　　ベガです。」

すると部屋は驚きの声が響いた。

「ぼ、僕の息子!」

「そうだよ父さん。」

みんなベガに質問しようとする、ミソラが誰よりも早く質問した。

「あなたの母親は誰!」

「星河　ミソラ。昔は響　ミソラだったっけ?」

ベガがそう答えると、ミソラはスバルに抱きついた。

「やった! 私達結婚するんだ」

「離してよミソラ!」

「父さんと母さん昔もラブラブだったんだ。」

冷やかすようにベガが言うと、

「「親をからかわない！」」

二人怒りながらハモった。

「後、一人紹介するわよ。入って来てちょうだい。」

するとベガと同じくらいの少年が入って来た。

その少年は髪は茶髪で熱斗と同じバンドナをしていた。そして足にはローラースケートをつけていた。

「自己紹介してちょうだい。」

またもヨイリーは笑顔になって言った。

「こんにちは！光 翔理です。」

今度は熱斗が

「俺の息子！」

と驚き、メールが

「あなたの母親は誰！」

と聞くと

「光 メールです。旧姓は桜井です。」

「やった！私達結婚するんだ」

そう言ってメールは熱斗に抱きついた。

「ラブラブだね二人とも。」

翔理が冷やかすように言い、熱斗とメールは

「「親をからかわない！」」

怒られた。

「まあまあ落ち着いて。この二人には新しいPGMを渡したわ。それとこの二人はスバルちゃんの家に住んでね。」

そうしてみんなはWAXAを後にした。

・ウェブライナーの中・

ベガはスバルとミソラに質問責めだった。

「そういえばベガは好きな人はいるの？」

何気なく聞くと、ベガは顔を赤くして、

「いるよ！」

するとスバルとミソラは笑って

「「がんばってね！」」

ベガを応援した。

一方翔理は熱斗とメールに質問責めだった。

「翔理は好きな人いるの？」

何気なく聞くと、翔理は顔を赤くし、

「いるよ！」

熱斗とメールは笑って

「「がんばれ！」」

翔理を応援した。

ウェブライナーの中ではそれぞれの家族が盛り上がっていた。

- スバルの家 -

「「「「「ただいま！」」「」「」」」」」

「おかえり！」

茜が荷物を持ちながら迎えた。

「何してるの母さん？」

「物置きを片付けて部屋を作ってるの！狭いでしょ！だから手伝って！」

そしてみんなは手伝った。

- 物置き -

ミソラとメールはたくさん積んである箱を取ろうとすると、箱が崩れ落ちた。箱はミソラとメールは箱の下敷きになった。

「きゃー！！」

「大丈夫！！」

スバルと熱斗はそれぞれ助けた。

「ありがとう」

ミソラはスバルに、メイルは熱斗にキスした。

二人は真っ赤になった。

それから荷物が片付いたのは2時間後だった。

つづく

それぞれの息子（後書き）

次回はこの続きです。感想待っています！

二人の息子の挑戦

片付けが終わり、その部屋は熱斗とメールと翔理の部屋になった。

「スバルの部屋」

ミソラは夕飯作りを手伝いに行った。

残ったスバルとベガは未来はどうなっているか話していた。

「父さんはWAXAで働いていて、母さんは歌手活動してるよ。」

「そっなんだ。ベガは今何歳？」

「12歳だよ。」

「一緒だね。」

親子は盛り上がっていた。

『俺は未来は何してるんだ？』

ウォーロックが聞くと、

「ウォーロックはハーブと結婚して一緒にWAXAで働いてるよ。」

『何！あいつと結婚！嘘だろ！』

ベガの答えに驚いたウォーロック。

そんなウォーロックを無視してスバルは質問した。

「ベガのウィザードはどんなの？」

スバルが聞くと、ベガの横にウィザードが現れた。

そのウィザードはウォーロックにそっくりだった。

「はじめまして、アルタイルです。アルと呼んで下さい。」

丁寧な挨拶で驚いたスバル。

「電波変換できるの？」

スバルが聞くと、

「できるよ。今します。トランスコード・メテオ ロックマン）
以後メテオ）！」

するとベガは体が赤いロックマンになった。

「僕にそっくりだね。」

啞然としているスバルに電波変換を解いたベガが

「今からバトルしませんか？」

「いいよ。」

そしてこの後二人はバトルした。

- 熱斗の部屋 -

メイルはミソラと同じく手伝いに行っていた。

熱斗は翔理に色々聞いていた。

「翔理、俺とメイルはどうしてるんだ。」

「いつもラブラブで少し喧嘩するけど仲がとってもいいよ。」

「そうか、良かった！」

熱斗は笑顔になった。

「そういえば翔理のナビ見せてよ。」

「これです。」

翔理はハンターV Gを見せた。

『こんにちは！僕の名前はエメラルドです。』

エメラルドは緑色の体でロックマンにそっくりだった。

『よろしくねエメラルド君。』

『こちらこそロックマンさん。』

ナビ同士仲良くなるのが早かった。「翔理、クロスフュージョンは出来るのか？」

「できますよ！なら今から勝負しませんか。」

「望むところだ！」

「クロスフュージョン！！」

熱斗はエグゼに、翔理はエメラルドになった。

こうして二つの父子はバトルをはじめた。

U
U
<U>

二人の息子の挑戦（後書き）

次回はスバル対ベガのバトルです。感想待ってます！

父子の戦い

・ウェーブロード・

そこにはロックマンとメテオがいた。

「行くよ！メテオ！」

そう言うロックマンはファイターソードに変え、メテオに向かって走った。

「バリア、キャノン×3ギョラクシーアドバンス！」

メテオも対処し、両方ダメージを食らわなかった。

しかしこの後、両方は苦戦した。

二人はボロボロだった。するとロックマンは

「SSPGM起動！スターフォース！ペガサス！」

するとロックマンはペガサスに姿を変えた。

「いくよー！」

ロックマンは空高く飛んだ。

するとメテオの下に魔法陣が出て来た。

「なんだこれは！」

「ペガサスフリーズ！」

魔法陣から巨大な氷柱がメテオを襲った。

「うわぁー！！！」

「やった！」

「まだだ！」

メテオは氷柱から抜け出し、

「NFB！サンダーシューティングメテオ！」

すると雷をまとった隕石が降り注いだ。

ロックマンは避けようとするが、

「逃がすか！」

メテオはキャノン+マヒプラスを放ち、ロックマンに当たった。

「くそ！はっ！」

ロックマンはメテオにスプレッドガンを放ち、的中した。

そしてメテオに的中すると、隕石もロックマンに的中した。

「「うわぁーーーー！」」

二人は大ダメージをくらい、立てなくなるほどだった。ロックマンは変身が強制解除された。

二人はロックバスターを構え、

「「これで決める！！」」

二人がチャージショットを放とうとすると、

「ショックノート！」

二つの音符が二人を襲った。

「まったく怪我したらどうするの！スバルは心配かけないで！」

「「めんミソラ」」

「後で言う事聞いてね」

「俺は無視……」

ベガは無視されスバルとミソラはラブラブだった。

そしてスバルとミソラは腕を組んで帰った。

一方その頃

とある電脳ではエグゼとエメラルドが闘っていた。

「トリプルアロー、メガキャノン、ロングソード……!」

「メットガード……!」

必死の攻防だった。

するとエグゼが

「ソウルユニゾン! ブルースソウル……!」

エグゼが光に包まれ、ブルースの姿になった。

「いくぞ……!」

するとエグゼはエメラルドを何回も斬りつけた。

エメラルドはボロボロだった。

「それなら僕だって！ソウルユニゾン！フォルテソウル！」

エメラルドは光に包まれ、フォルテの姿になった。

「はぁーーーーー！」

エメラルドの手から紫の閃光を何十発も放った。

「うわぁーーーーー！」

エグゼは全て当たった。そして変身が強制解除された。

「まだまだ！メガキャノン！」

エグゼが放つとエメラルドは当たり、変身が強制解除された。

しかし二人は諦めず、

「これで決める！！！」

二人はキャノンを放とうとすると、ロールが現れた。

「止めなさい！」

ロールの一言で二人は止めた。

「怪我したらどうするの！」

「「ごめんなさい。」」

二人は謝った。

するとロールはエグゼに駆けより、抱きしめた。

「心配かけないで熱斗！」

「ごめんなメール、後で言う事聞いてやるから」

「ホントだよ」

「僕無視……」

熱斗とメールは翔理を無視し、腕を組んで帰った。

こうして二つの父子の戦いは終わった。

u
u
u

新たな力

父子の戦いが終わった後、みんなは夕飯を食べていた。

その時大吾と茜は嬉しそうだった。

不思議に思ったミソラが、

「お父さん、お母さんなんで笑ってるの？」

すると茜が

「だって孫が早く見れたんですもの。ねえ、大吾さん。」

「ああ。」

そんな夫婦を見てスバルとミソラは笑った。

すると熱斗が

「俺も母さんに見せたかったな。」

残念そうに言うと、

「写真撮ったらいいでしょ！」

呆れたようにメールが言うと、

「そっか！」

「ホントバカなんだから…」

「うるさいな！」

少し喧嘩した二人だが、すぐ終わった。

食べ終わると、

「ベガ！翔理！明日WAXAに来てくれ！スバルとミソラと熱斗とメールもだ！」

「……………なんで？」

「ベガと翔理はちょっとした戦闘テストだ。他はそれぞれテストの様子を見てくれ。」

「……………ハ～イ！」

そしてそれぞれ部屋に行った。

・熱斗の部屋・

熱斗の部屋にはベットと布団がそれぞれ一つあった。

「じゃあお父さんお母さんおやすみ！」

そう言って翔理は布団に寝た。

「俺達も寝るか。一緒に」

「うん」

熱斗は寝ようとする、メールに止められた。

「なんだメール？」

「おやすみのキス」

「えー！」

とても嫌がると、メールは黒いオーラをはっした。

「言う事聞いてくれるって言ったよね！」

熱斗は観念して、

「わかったよ！毎日してやるよ」

「いいの？」

熱斗の意外な言葉にメールは驚いたが、すぐ笑顔になって

「うん」

そして二人はキスをして寝た。

勿論抱き合って。

その頃スバルの部屋

「おやすみ父さん、母さん。」

「「おやすみベガ。」」

ベガは布団に寝た。

「僕達も寝よう！」

「そうだね。」

二人はベットに横になった。

ベッドの中ではスバルとミソラが話していた。

「ねえスバル。」

「何ミソラ？」

「PGMの決意と絆は何か決めた？」

スバルは少し考え、口を開いた。

「決意は決めたよ。絆は分らないけど。」

「何？」

スバルはミソラを見て微笑みながら、

「ミソラを何があっても一生守るって。」

するとミソラは涙目になり、

「ありがとうスバル！」

スバルに力強く抱きしめた。

「なんでミソラが泣くんだよ！」

ミソラは涙をぬぐいながら、

「だって嬉しいんだもん スバルが決めたから私も決意する！」

「何？」

今度はミソラがスバルを見て微笑みながら、

「私はあなたを何があっても一生サポートする！」

「ありがとうミソラ。」

すると二人は意識が薄れた。

二人は目を開くと、そこは白い空間だった。

「スバル！どこ？」

「ここにいるよミソラ」

「良かった！」

ミソラはスバルに抱きついた。

二人は腕を組んで周りを見回した。

すると二人の前に二つの影が現れた。だんだんと影が消えると、二体のウィザードが見えた。

「あなた達は誰？」

スバルが勇気を振り絞って聞くと、

『俺の名は闇の支配者フォルテ。』

『私の名は光の支配者セレナード。』

するとスバルは

「フォルテってライトのフォルテ？」

『それは違う。俺とあいつは姿は同じだが違う存在だ。』

するとミソラは

「あなた達は何をしに来たの？それからここはどこ？」

心配そうに聞くと、

『安心しなさい。ここはあなた達の意識の中です。今回は決意したので私達の力の一部を与えます。』

「一部？」

二人は首を傾げると、フォルテが言った。

『当たり前だ。お前達は決意をしたが絆がまだだ。』

するとウォーロックがしびれを切らしたのか、

『早く力を与えろ！』

すると二体は

『いいだろう…ロックマンには闇の力をやろう…』

すると黒い光がロックマンの体の中に入った。

「これでいいの？」

『ああ。』

するとセレナードが

『ではハーブ・ノートには光の力を与えましょう。』
すると金の光がハーブ・ノートの体の中に入った。

全て終わると、セレナードが

『あなた達にヒントをあげましょう。絆は相手に対する思いです。』

「思い？」

『ああそうだ。』

そう言うときセレナードとフォルテは消えた。

スバルとミソラは現実に戻った。

「「思いか……」」

二人は呟き考えたするとミソラが

「もう寝ようスバル！」

「そうだねミソラ、おやすみ」

「おやすみスバル」

二人はキスをして抱き合って寝た。

こうして二人は新たな力を手に入れた。

つづく

新たな力（後書き）

今度から1日一話更新します。感想待ってます！

テスト

- 翌日 -

六人は朝食を食べていた。

「早く食べなさい！遅刻するわよ！」

茜が言うと、みんな急いで朝食を食べ、出発した。

- WAXA 訓練第一室 -

そこにはアシッドエースとメテオがいた。その硝子越しにスバルとミソラはいた。

「よし！始めるぞ！」

するとメテオはすぐに攻撃した。

そして二人は必死の攻防だった。

その頃スバルとミソラは戦いを笑顔で見ていた。

「スバル、私達の子供とても元気だね。」

「そうだねミソラ 後ベガが言ってたよ。とてもラブラブだって。」

「当たり前だよ！だって私達は夫婦だもん。」

そして二人はキスをした。

・訓練第二室・

ここもクインティアとエメラルドがいて、硝子越しに熱斗とメールが見ていた。

「それじゃあ始めるわよ。」

そう言っているとクインティアが攻撃した。

こちらも必死の攻防だった。

硝子越しで熱斗とメールは見ていた。

「翔理大丈夫かな？」

メールが心配そうに言うと、熱斗がメールの肩に手を乗せて、

「大丈夫だよ！」

「なんで？」

「俺達の息子だから」

「熱斗…そうだよね！」

二人はキスをした。

- 数時間後 -

「テストの結果を言う、何も悪い事は無かったが、お前達の必殺技を禁止する！」

「「なんで？」」

驚いたように言うと、

「お前達の必殺技は仲間にも危害が及ぶ。わかったか！」

「「ハイ！」」

そうして解散した。

この後みんなは帰ってすぐに寝た。

う
う
く

覚醒

- 数日後 -

ルーシはキーボードを打っていた。

「よし、出来たぞ！シャドウ、融合するぞ！」

「はっ！」

するとシャドウは機械の中に入った。

すると機械の姿が変わりアンドロメダとラ・ム が合体した姿だった。

「ついに出来た…電波テクノロジー破壊装置…ダーク・ネビュラ・シャドウ！」

ルーシはスイッチを押した。

しかし何も動かない。

「やはりシノビのオーパーツが必要か…いや待て、データさえあつたらいけるか…」

するとルーシはカプセルを取った。

カプセルには赤い字でアクアと書いていた。

ルーシは開けると、体全体が水のウィザードが現れた。

『バトルやるの！やった！私超嬉しい！早く指令！』
女らしきウィザードが言った。

「シノビのオーパーツのデータをとってこい！その前にロックマンを殺せ！」

するとアクアは笑って

『了解』

アクアは消えた。

- スバルの部屋 -

ミソラは仕事でいなかった。すると暁からメールが届いた。

「シノビのオーパーツを見つけた。場所はアメロッパ。行こ！」

そしてスバルはアメロッパに向かった。

- アメロツパ -

湖の底にはアクアがいた。

アクアはシノビのオーパーツのデータをレーザーでとっていた。

『データ読み取り完了!』

するとアクアはロックマンの電波を感知した。

『来た来たロックマン! まずは小手調べ。』

アクアは上に光を発射した。

『さて楽しみ!』

アクアは楽しそうに笑った。

- ウェーブロード -

ロックマンはウォーロックの指示通りオーパーツの所へ向かった。
た。

『おいスバル！後ろからあいつが来たぞ！』

ロックマンは振り向くと、ハーブ・ノートがいた。

「ハーブ・ノート！なんで来たの！」

「私はスバルをサポートするって言ったでしょ！」

「ミソラ…ありがとう！」

ロックマンはハーブ・ノートの頭を撫でた。

そして再び走り出した。

するとハーブが

『空から何か来るわよ！』

二人は上を見ると、黒い物体が降って来た。

『ロックマン…抹殺！』

すると黒い物体は二人を襲った。

ロックマンは避けたが、ハーブ・ノートはくらった。

「きゃあーーーー！」

「ハーブ・ノート！」

ロックマンは叫ぶが、黒い物体はハーブ・ノートの攻撃を止めない。

「許さない…絶対守る！」

- よく言ったスバル！ -

「この声はサイクロン！」

- ああ、お前に力を与えよう。闇の力を手に入れたからな。 -

「ありがとう！よし行くよ！ダークチェンジ！ウィンド・サイクロン！」

するとロックマンは光に包まれ、エメラルドグリーンの体になった。

「きれい…」

ハーブ・ノートが言った通り、確かにきれいだった。

『姿を変えても無駄だ！』

黒い物体はハーブ・ノートへの攻撃を止め、ロックマンに攻撃した。

「ウィンドシールド」

ロックマンの前に強い風が吹き、黒い物体の攻撃を打ち消した。

『何!』

「ウィンドスラッシャー!」

ロックマンの腕が風で出来た剣に変わった。

そして黒い物体を切り刻んだ。

『まだ…だ!』

黒い物体は最後の攻撃を放ち、ロックマンに当たった。

『ばか…め…』

そう言うとき黒い物体は消えた。

ロックマンは攻撃を受け、吹っ飛んだ。

「うわぁーーーー!」

するとハーブ・ノートが泣きながら、駆けよった。

「大丈夫!嫌だよ!死なないで。サポートするんだから。」

『なら光の力を使いなさい。』

ハーブ・ノートの頭の中に響いた。

「あなたはセレナード！」

『あなたの力は人を慰める能力があるのです。』

するとハーブ・ノートが光に包まれ、白い体になった。

「ライトチェンジ、エンジェルハーブ・ノート。」

そう言うとロックマンの方を見て、

「今治すよ。ライトソング！」

ハーブ・ノートが小声で歌うと、ロックマンは起きた。

「ハーブ・ノート…ありがとう！」

ロックマンはハーブ・ノートに抱きついた。

「ロックマン…」

しばらくして離すと、ロックマンが

「行くよ！」

「うん！」

そう言うと二人は湖に向かった。

- 湖の底 -

『来たわねロックマン!』

アクアは不敵な笑みを浮かべていた。

つづく

真の力解放・闇・

・湖の底・

ロックマンとハーブ・ノートはシノビのオーパーツを探していた。

「あつ！ロックマンあれ！」

ハーブ・ノートが指したのはシノビのオーパーツだった。

「あれだ！」

二人は取りに行こうとすると、

『来たわねロックマン！』
上から声がした。

「誰^だ！！」

『私の名はアクア、ルーシ様の指示でロックマンのデリートとシノビのデータを取りに来た。』

アクアの言った事に驚いた二人。

「何故持つて行かない！」

するとアクアは笑って

『だって電波テクノロジー破壊装置にデータさえあればそれでいいもん。』

「「電波テクノロジー破壊装置？」」

二人は首を傾げた。

するとアクアが

『どうせ死ぬから教えてあげる。ルーシ様は電波テクノロジー破壊装置、ダーク・ネビュラ・シャドウを使って電波テクノロジーを破壊しようとしている。』

二人は驚いた。

するとロックマンは

「なら僕達はお前を倒して阻止する！」

そう言うつと攻撃した。

『無駄よ！』

アクアは防御した。

「バブルフック、キャノン×3ギャラクシーアドバンス、レーザー

ミサイル＋マヒプラス！」

レーザーミサイルは当たらなかったが、後の全ては当たった。

しかしアクアはダメージをくらっていない。

「何！」

『今度はこっちから行くよ！アクアタワー、バブルハリケーン！』

ロックマンはアクアタワーは避けたが、バブルハリケーンは当たった。

すると

「サンダーショックノート！」

ハープ・ノートが攻撃したが当たらなかった。

「くそ！ダークチェンジ！ウィンド・サイクロン！」

ロックマンは変身した。

「ウィンドスラッシュ！」

アクアを切るが、アクアは笑っていた。

『バブルバスター。』

アクアは泡のバスターを発射した。

「うわぁーーーー！」

ロックマンは全て当たり、遠くへ飛ばされた。

するとアクアはハープ・ノートを見て、

『次はあなたよ！』

そう言うときアクアはハープ・ノートを攻撃した。

「きゃーーーー！」

飛ばされたロックマンは、体が動け無かった。

ロックマンはハープ・ノートが攻撃されているのを見てるしか無かった。

「くそ！これじゃあハープ・ノートを守れ無い。」

ロックマンは地面を叩いた。

するとロックマンは意識が薄くなり、目を開くと、白い空間だった。

するとフォルテが現れた。

『つたく、何やってんだよ！大切な人を守るんだろ！』

「でも僕にはその力が無い。」

悔しそうに言うと、

『じゃあなんで大切な人を守るんだ。』

「えっ！」

驚くロックマンにフォルテは呆れて言った。

『絆つてのは相手をどう思ってるかって事だ。』

「そうだったのか…」

驚いたロックマン。しかしその後笑いながら、

「僕が大切な人を守る理由は、大切な人が好きだからだ。」

『よし、これで揃った。お前に真の力をやろう。』

すると現実に戻った。

「凄い！力が湧いてくる！」

『ああ、これならアクアに勝てるぞ！』

ウォーロックは嬉しそうに言うとスバルは立ち、

「行くよ！ダークファイナライズ！ロックマン・ダークフォルテブレイク！」

するとロックマンは黒い光に包まれた。

ロックマンの体は黒く、茶色の古そうなマントがあり、目が赤くなっていた。

そしてロックマンはハープ・ノートの所へ向かった。

「待っててねハープ・ノート。それより体が変わだな。」

ロックマンの言う通り、体が変わなことは後に最悪な事態を起こした。

つづく

真の力解放 - 闇 - (後書き)

昨日更新出来なくてすいません！今日は後一話ほど更新します。感想待ってます！

暴走

ハープ・ノートはアクアの攻撃を受け続け、死にそうになっていた。

『これで最後よ!』

「（助けてロックマン!）」

ハープ・ノートがそう思い、目を閉じた。

ドーン

爆発音になった。

「死ん…でない?」

ハープ・ノートは目を開くと、浮いていた。

ハープ・ノートはロックマンに抱き抱えて浮いていた。

「ロックマン!」

「今助けに来たよ!」

するとハープ・ノートは不思議そうに

「その姿は?」

「SSPGMが真の力をくれたんだ。」

するとハープ・ノートが泣いた。

「私怖かった…」

するとロックマンは優しく微笑み、

「大丈夫だよハープ・ノート。」

そしてロックマンの顔が真剣になり、

「アクア！お前は許さない！」

そう言ってハープ・ノートを降ろし、アクアの方向へ歩いた。

『また姿を変えても無駄よ！』

アクアは攻撃したが、ロックマンの周りにオーラが現れ、消した。

「ダークバスター。」

紫のバスターを発射すると、凄い速さでアクアに当たった。

『うわっ！』

アクアは吹っ飛んだ。

『ばかな…バスターで…これほどのダメージ…ふざけるな！強いのは私だ！』

怒ったアクアはロックマンにバブルバスターを連射した。

しかしロックマンはオーラに包まれ、ダメージをくらわない。

「これで決める、ダークファイナルブレイク D F B・ダークシャドウバスター！」

ロックマンのバスターに闇の力が集まり、巨大な紫の光線を発射した。

『こんな物！』

アクアは避けようとするが、

「サンダーショックノート！」

ハープ・ノートの雷属性の攻撃をくらい、麻痺した。

『くそーーーーー！』

アクアはロックマンの攻撃を受け、消えた。

「ロックマン！大丈夫？」

ハープ・ノートが心配そうに言うと、

「大丈夫だ…うっ！」

突然ロックマンが苦しみだした。

「大丈夫かスバル、ミソラ！」

「大丈夫か！」

「大丈夫父さん、母さん？」

「大丈夫？スバル君、ミソラちゃん！」

「大丈夫かスバル、ミソラちゃん！」

「大丈夫スバル君、ミソラちゃん！」

「大丈夫ですか？」

アシッドエース、ジャック、メテオ、ジェミニ、エグゼ、ロール、エメラルドの順で聞いた。

「それが、突然苦しみだして。」

ハープ・ノートは慌てて説明した。

するとロックマンが

「みんな…逃げて…早く…」

と言い出した。

「嫌！置いていけない！」「駄目だ…早く…うわぁーーーー！！！」

ロックマンが叫ぶと、黒いオーラに包まれた。

「ロックマン！」

「離れるミソラ！」

暁が言うが、ハープ・ノートは遅れ、

「きゃ！」

ロックマンの攻撃をくらった。

「ロックマン！元に戻ってよ！」

そう叫んだハープ・ノートだった。

つづく

真の力解放 - 光 -

暁達はロックマンを囲んだ。

「よし、今からロックマンを元に戻すぞ！」

一斉に攻撃した。

しかし闇の力を使っているロックマンが優勢だった。

するとエグゼが

「目を覚ませスバル！」

メガキャノンを発射した。

しかしオーラに消され、

「ダークバスター！」

ロックマンの攻撃を受け、吹っ飛んだ。

「熱斗！」

ロールがエグゼを助けようとするが、

「ダークバルカン！」

ロールも攻撃を受けた。

するとメテオをとエメラルドが、

「みんな離れて！」

「早く！」

二人の言う通り、離れた。

「ソウルユニゾン！フォルテソウル！」

エメラルドが変身し、メテオが、

「NFBシューティングメテオ！」

隕石の攻撃をするが、効かなかった。

「まだまだ！シャドウレーザー！」

エメラルドが放つが効かず、

「ダークスラッシャー！」

メテオとエメラルドは切られた。

そんな姿を見たハーブ・ノートは泣いていた。

「早く戻ってよ……こんなロックマン好きじゃない！いつものロックマンの方が好き！」

するとハーブ・ノートは意識が薄くなり、目を開くと白い空間だった。

するとセレナードが現れ、

『あなたは絆と決意が揃いました。』

「えっ、絆はなんにも考えてないよ。」

驚くハープ・ノートに優しくセレナードが

『絆はあなたの大切な人をどう思っているかです。だから揃ったのです。』

「そうなんだ。」

納得したハープ・ノート。

『ではあなたに光の真の力を与えましょう。この力を使うと闇に勝てます。』

「わかりました!」

ハープ・ノートが元気よく返事すると、セレナードは笑い、

『がんばって下さい。』

と応援した。

ハープ・ノートは現実に戻った。

「ロックマン、元に戻ってね。ライトファイナライズ！ハープ・ライトエンジェルセレナード！」

するとハープ・ノートは金色の光に包まれた。

体が白色で、腕や足は金色だった。銀色の翼があり、ハープ・ノートの周りを金色の輪が二つ回っていた。

「ついに変身したか…」

暁が待っていたように言った。

ハープ・ノートが

「サークルレーザー！」

二つの輪からレーザーが発射された。

ロックマンはオーラを出したが、

「エンジェルシャイン」

翼から光を出した。するとオーラが蒸発して消え、レーザーが当たった。

「今だ！」

暁が叫ぶと、みんな攻撃した。

当然オーラが消えたロックマンはくらった。

「これで決めるよ！」

ハープ・ノートが言うと、手と二つの輪に金色の光が集まった。

「ライトフォースブレイク
LFBライトシャイニングレーザー！」

ハープ・ノートが光を発射した。

「うわぁーーーーー！」

ロックマンの変身は解け、普通のロックマンに戻った。

そして倒れた。

「ロックマン！」

ハーブ・ノートは駆けよった。

「安心しろただの気絶だ。」

暁の言葉に安心したハーブ・ノートだった。

- 数分後 -

「うーん……」

ロックマンは目が覚めた。

「ロックマン！大丈夫？」

「ハーブ・ノート……その姿は？」

「光の真の力よ。それより心配したんだから！」

そう言いハーブ・ノートは泣きながらロックマンに抱きついた。

「は…離してよハーブ・ノート!」

ロックマンは真っ赤になった。

「ラブラブ中失礼だがWAXAに来てくれ。」

「暁さん!」

そうしてみんなはWAXAに向かった。

つづく

真の力解放 - 光 - (後書き)

感想待ってます！

宣告

- WAXA -

「まずこれを見てほしい。」

暁が言うと、画面に二体のウィザードが現れた。

「「セレナードとフォルテ!!」」

スバルとミソラが言った。

するとヨイリーが入って来た。

「実はスバルちゃんとミソラちゃんの変身の関係について話すわ。」

暁とヨイリー以外首を傾げた。

すると暁が

「まずロックマンの変身はダークフォルテブレイクだ。」

そしてフォルテが説明した。

『「この変身は強力なノイズとある物で出来る。そのある物とは……」』

セレナードが言った。

『憎悪です。恐らくその憎悪の影響で暴走したのでしょう。』

セレナードは深刻そうに言った。

するとヨイリーが沈黙を破り言った。

「そしてハープ・ノート、ハープ・ライトエンジェルセレナードよ。」

そしてセレナードは説明した。

『ライトエンジェルセレナードは憎悪と反対に慈悲で変身出来るの。だから闇に勝てた。』

するとフォルテが真剣な顔で言った。

『今から警告する。ロックマン、ハープ・ノートがいない時はダイクファイナライズするな!』

この言葉に全員驚いた。

「なんで?」

スバルが聞くと、セレナードが答えた。

『もしハーブ・ノートがない時に変身すると必ず暴走するわ。だから光が無いといけないの。』

さらにフォルテが、

『ハーブ・ノートがない時に変身出来るのは後3回だ...。』

しばらく沈黙が続いたが、スバルが

「わかりました！」

返事をした。

そして二体は消えた。

するとツカサが、

「だったら僕とジャックはファイナライズ出来るように修行するよ！」

するとジャックも

「ああ、今日中に出来るようにするぜ！」

「ツカサ君...ジャック...ありがとう！」

スバルは笑って言った。

「さあツカサとジャック以外家に帰れ。二人はここで修行する。」

そして家に帰った。

つづく

宣告（後書き）

次回は家での話です。最近熱斗、メイル、ベガ、翔理、ライトの出席が少ないですね。後シノビはちゃんと回収しました。感想待ってます！

心配

- スバルの部屋 -

スバルの部屋には久しぶりにみんなが集まっていた。

「スバル、俺も力になれるように修行するよ！」

「熱斗だけじゃ無いよ。私や翔理、ベガも力になれるように頑張るわ！」

熱斗とメールの言葉に安心したのか、

「ありがとう二人とも。これからウイルス狩りしよ！」

スバルが提案した。

みんなは了解した。するとミソラが、

「スバル、ちょっと話があるの。みんなは先に行つてて。」

スバルとミソラ以外部屋を出た。

二人きりになった。

「スバル……」

「な……何ミソラ？」

二人きりなので少し緊張するスバル。

「あのね、変身の事なんだけど。」

「うん、ハーブ・ノートがない時は僕が変身したら駄目なんですよ。」

スバルが言うとミソラはうなずいた。

「実はみんながいない時ヨイリー博士と暁さんとセレナードに言われたの。」

- 回想 -

「実はミソラに言いたい事がある。」

するとセレナードが言った。

「実はハーブ・ノートがない時に闇の変身を3回するとロックマンは死んでしまいます…」

この言葉にミソラは驚いた。

「嘘でしょ……」

するとヨイリーが

「本当よ…変身した時からスバルちゃんの体が齧まれてるわ…」

しかしフォルテが救いの一言を言った。

『しかしお前が本当に大切だと今までより強く思つと完全になる。』

この言葉に安心した。

「わかった！でも難しいな…」

すると優しくセレナードが、

『純粹に思えばいいんです。』

「はい！」

- 回想終了 -

するとスバルが、

「ありがとうミソラ、心配してくれて。」

そう言って抱きしめた。

「私はいつまでもスバルの傍にいるよ。」

そう言ってさらに強く抱きしめた。

この後二人はウイルス狩りに行き、合計10万體デリートしたらしい。

つづく

心配（後書き）

次回は番外編でツカサとジャックの修行を書こうと思います。感想待ってます！

・番外編・ツカサとジャックの修行

・WAXA訓練第二室・

「よし、まずジェミニからだ。」

「ハイ！」

『おう！』

暁に言われツカサとジェミニはうなずいた。

「まずツカサは決意があるか？」

暁が聞くと、

「はい。」

と返事し、顔を真剣にして、

「僕とジェミニがした罪を償い一生抱える。」

すると暁が

「いいだろう、ヒカル、絆は？」

ヒカルはウィザードONして言った。

『俺達は友達だ。ただの友達じゃない。お互いに一生助け合う友達だ。』

するとツカサとヒカルは意識が薄くなり、目を開くと白い空間だった。

「ここはどこヒカル？」

『わからねえ。』

ツカサとヒカルが話し合っていると、目の前にウィザードが現れた。

「『誰？』」

二人は聞くと、

『小生の名はエレキ、今日は貴殿にファイナライズの力を与えます。』

エレキはそれだけ言い、消えた。

二人は現実に戻った。

「どうやらファイナライズの力を手に入れたようだな。」

暁が言った。

「なんでわかったんですか？」

不思議そうに聞くと、

「究極の変身をするセンサーが反応するんだよ。」

ツカサは納得した。

「よし、今度はジャックだ。決意は？」

暁が聞くと、

「うーん…世界の人々を守りたい！だな。」

するとクインティアが、

「もっとまともな決意はないのかしら。」

呆れたように言ったので、

「仕方ねえだろ！これしかねえんだから！」

喧嘩しそうになったので、

「まあまあ落ち着け。絆は？」

聞くと

「んなもんいろいろあるよ！」

あっけなく言った。暁とクインティアはため息をした。

しかしジャックの意識が薄くなり、目を開くと白い空間だった。

するとウィザードが現れた。

「誰だお前？」

ジャックが聞くと、ウィザードが答えた。

『俺の名はフェニックス、お前氣に入ってたぜ！』

明るく聞くと、ジャックが、

「なんで？」

鬱陶しそうに言った。

するとさらに明るく、

『その性格だ。それよりファイナライズの力をやるよ!』

「サンキュー!」

ジャックが言いつと消えた。

そして現実に戻った。

暁とクインティアは啞然としていた。

すると暁は我にかえり続けた。

「二人ともファイナライズ出来るから二人でファイナライズしてバトルしろ!」

そして暁とクインティアは部屋を出た。

「じゃあいくよー!」

「ああ！」

二人はすでに電波変換していた。

「まずは僕から。いくよ！ヒカル！」

『いいぞ！』

そしてジェミニは叫んだ。

「エレキファイナライズ！ジェミニ・エレキブレイク！」

するとジェミニが雷に包まれた。

ジェミニが一人になっていて、腕が黒と白になっていた。

そして常に四つの稲妻がジェミニの周りにあった。

「じゃあ俺もするぜ！フェニックスファイナライズ！ジャック・フレイムフェニックスブレイク！」

ジャックは紫の炎に包まれた。

炎が消えた。

体が赤くなっていて、翼が少し大きくなり、炎のオーラに包まれていた。

「始めろ！」

スピーカーから暁の声が聞こえると同時に二人は激しくぶつかった。

「エレキバルカン！」

「甘い！フレイムオーラ、ファイヤービースト！」

ジェミニの雷のバルカンをジャックはオーラで防ぎ、炎をまとった爪で引き裂いた。

「ぐはっ！」

ジェミニはくらったが、

「サンダーリカバリー！」

四つの稲妻がジェミニに直撃した。

しかしジェミニの傷は治っていた。

「なに！」

驚くジャック。するとジェミニが、

「お返しだ！エレキバルカン、稲妻落とし、サンダースラッシュ！」

雷のバルカンを撃ち、四つの稲妻をジャックに落とし、さらに雷をまとった剣で切った。

「ぐはっ！くっ！」

さすがにこの攻撃を受け、力があまり残っていなかった。

しかしジェミニも攻撃している時に攻撃され、あまり力が残っていなかった。

すると二人は立ち上がり、

「これで決める!!」

ジエミニは四つの稲妻を手に集め、さらに他の電気を集めていた。

エレキフォースブレイク

「EEFB、サンダーチャージボルトブレイク!」

雷を一気に発射した。

「ならこつちも!」

ジャックはそう言い、両手に紫の炎を集め、

フェニックスフォースブレイク

「FFFB、ファイヤフェニックスブレイク!」

炎を次々発射した。

両方の必殺技が衝突した。

「うおー!」

「は―――！」

やがて爆発した。

二人とも倒れていた。

- 数十分後 -

二人は所々包帯を巻いていた。

「二人とも凄かった！以上解散！」

こつして修行が終わった。

つづく

- 番外編 - ツカサとジャックの修行（後書き）

意外と長い。感想待ってます！

判明

・リビング・

テーブルにはスバル達が座っていて、向かいに大吾が座っていた。

「まず伝えたい事がある。」

その言葉にスバル達は黙った。

大吾が言った。

「新生・WWWの基地が判明した。」

この言葉に驚いた。

しかし大吾は続けた。

「そして基地に乗り込もうと思う。詳しい事は明日WAXAで話すから来てくれ。」

するとスバルが質問した。

「どうしてわかったの？」

「実はライトが教えてくれた。どうやって知った分らない。」

スバル達は疑問に思った。

しかし余計な詮索はしないでおこうと思ったスバル達。

そして部屋に戻った。

つづく

判明（後書き）

短くてすいません！最近更新が深夜が多いです。明日更新できるか分からないので後一話更新します。感想待ってます！

衝撃

- WAXA司令室 -

画面の前にライトがいて、その向かいにライトを除く遊撃隊のメンバーが立っていた。

雰囲気は重苦しいものだった。

するとライトが喋った。

「今日はみんなに黙っていた事を話すわ…」

みんなの顔が真剣になった。

「実は私は新生・WWWの元幹部だったの。」

この言葉にみんなは衝撃を受けた。

しかしライトは続けた。

「私はルーシからフォルテをもらい、電波変換できるようになったの。そして色々な悪事を働くように命令された。」

ライトは顔をうつむいていた。

「でも私とフォルテはしなくなかった。なぜなら人の笑顔が好きだったから。」

この時みんなは辛かったんだと思った。

「だから私は組織を抜けて新生・WWWを潰そうと思った。」

そしてライトの話は終わった。

みんなは驚きの表情が隠せなかった。

するとスバルが言った。

「でもライトは間違っていない。それで正しかったと思うよ、ライトらしいし。」

そして剣太が、

「そうだぜ！だからこうして楽しく生活できてる。」

さらにミソラが

「私達はライトちゃんとブラザーなんだから。協力するよ。」

この言葉にライトは嬉しくて泣いていた。

「みんな…ありがとう！」

そしてライトは泣き止み、話した。

「今から新生・WWWの基地を言うわ…。」

みんなは再び黙った。

「場所は富士山の樹海よ！すでに詳しい場所は判明してるわ。」

みんなは驚いた。しかしライトはさらに衝撃の言葉を言った。

「後、新生・WWWはスバルのダークファイナライズでしか倒せない捨て駒の電波体を二体いるわ。」

「そんな！僕は最高で二回しか出来ないよ！まだ電波テクノロジー破壊装置も壊さないといけないんだよ！三回したら僕は死ぬんだよ！」

ミソラ以外最後の言葉に驚いた。

「スバル君：嘘でしょ。」

「どう言うだよスバル！」

ツカサとジャックが聞いて来た。

「事実だ。スバルは後三回したら確実に死ぬ。」

暁とヨイリーが入って来た。

暁まで言ったので黙るしかなかった。

するとスバルが聞いた。

「暁さん、何の用ですか？」

「今からハンターV Gをバージョンプする。まずスバルからだ。」

そう言ってみんなはハンターV Gをヨイリーに渡した。

「一時間程度で終わるわ。」

そう言ってヨイリーは部屋を出た。

・一時間後・

「スバル！終わったぞ！」

暁に呼び出され、スバルはハンターV Gを返してもらった。

ブー！ブー！

突然サイレンが鳴った。

するとアナウンスが流れた。

《スピカモールにて電波体が一体暴走したもよう、新生・WWWの電波体と思われます。》

アナウンスが終わると、スバルは現場へ行こうとした。すると暁に

「まで！スバルは行くな！俺が行く！」

しかしスバルは

「いや、僕が行きます！」

抗議した。暁はスバルの真剣な目を見てやれやれと言い、

「わかった、行ってこい！ただし無理するな！体が変わったらすぐに逃げる！」

そしてスバルは

「ハイ！」

そう言いスピカモールへ向かった。

つづく

消えた流星（前書き）

昨日更新出来なくてすいません！塾があり忙しくて。それでは本編をどうぞ！

消えた流星

・スピカモール・

ロックマンは到着した。

「どこにいる！」

ロックマンは叫んだ。

『俺はここだ！』

上から声がした。そして電波体が降りてきた。

地面に着いたと同時に電波体は剣で攻撃してきた。

「スーパーバリア、ブライソード！」

ロックマンはスーパーバリアで防御し、ブライソードで応戦した。

『……………』

電波体は黙りながら闘っていた。

- 数十分後 -

続いていたが、ロックマンはだんだんと押されてきた。

「仕方ない、ダークファイナライズ！」

ロックマンはダークフォルテブレイクに変身し、闘った。

- その頃WAXA司令室 -

『シドウ、ロックマンがダークファイナライズしました。』
アシッドが言った。

暁は焦って来た。

「まだか…」

するとヨイリーが入って来て、

「みんな、出来たわ！」

ハンターV Gをそれぞれに渡した。

そしてみんなは電波変換してスピカモールへ向かった。

・スピカモール・

今度は逆にロックマンが押していた。

しかしロックマンは焦りが見えて来た。

「やばい…体が変だ…」

『スバル！これで決めるぞ！』

ウォーロックが言い、ロックマンは必殺技を放とうとした。

「DFB！ダークシャドウソード！」

紫に光ったソードで電波体を切った。

「やった！」

誰もが勝利を確信した。

しかし電波体はかすかに残っていた。

「ぐっ！レーザーナイフ！」

ナイフを投げると同時に電波体は消えた。

「うっ！」

油断していたロックマンはくらった。

ナイフが刺さった場所は心臓だった。

「スバル（君）！！！！！！！！！！」

みんなが来たと同時にロックマンは口から血を吐いて倒れた。

「スバル！」

ハーブ・ノートがロックマンに駆けよった。

「スバル！死なないで！」

しかしロックマンの顔はどんどん生気を失っていく。

一同は泣く者や顔を俯かせる者もいた。

するとハンターV.Gが鳴った。

《新生・WWWの電波体にWAXA が襲撃されています！直ちに

来て下さい。》

しばらく沈黙が続いたが、アシッドエースが言った。

「みんな行くぞ！救急隊は呼んでいる。」

しかし、

「私は残ります！」

ハープ・ノートが言った。

すると暁が、

「わかった、許す。だが十分までだ。」

と言い、ハープ・ノートはうなずいた。

そしてハープ・ノート以外はWAXAへ向かった。

「早く目を覚まして！」

ハーブ・ノートは祈るしかなかった。

つづく

消えた流星（後書き）

ロックマンが死にました。ロックマンファンの皆さんすいません！
でも次回なんと……

感想待ってます！

復活

スバルは目を開けた。

そこは真っ白の空間だった。

「僕はどうなったんだっけ。」

するとウォーロックが答えた。

『俺達は電波体の攻撃を受けて死んだんだ。』

「そっか…」

スバルは悲しくなった。

『きつとミソラは悲しんでるぜ。』

ウォーロックの言葉に少し考えが浮かんだ。

「そういえばミソラが言ってた完全に闇の力を自分の物にする方法覚えてる？」

スバルはウォーロックに質問した。

『ああ、ミソラがスバルの事をより大切だって思うんだろ。』

名前を出されたので、スバルは少し赤くなってうなずいた。

「それで思ったんだけど大切だと思うのはミソラだけじゃなくて、僕もミソラの事を大切だと思わないといけないと思うんだ。」

スバルの発言にウォーロックは、

『確かに…：だったら今強く思ったらいいじゃねえか。』

「そうするよ。」

ウォーロックの提案にスバルは実行した。

「（僕はミソラが好きだ…：宇宙で一番好きだ…：）」

するとフォルテとセレナードが現れた。

『よく気付いたな。』

『あなたの言う通りです。』

そしてセレナードは言った。

『これでも何回もダークファイナライズ出来ます。』

スバルは安心するがフォルテが厳しい事を言った。

『ただし、暴走は起きる。』

「『へ！』」

思わず二人は変な声を出した。

そしてウォーロックが

『なんでだよ！』

完全に切れた口調で怒鳴った。

『仕方ないんだ。』

フォルテが残念そうに言った。

セレナードが続きを言った。

『暴走しないようにするには、闇とはどうゆう事なのかを知らなければいけません。』

スバルは少し考えた。

しかしスバルはある事を思い出した。

「そんな事より僕は死んでるよ。」

するとフォルテが言った。

『それは安心しろ、生き返りたいと強く思え。』

そう言うところとフォルテとセレナードは消えた。

「よし、僕は生き返りたい！」

するとスバルは意識が薄れた。

- スピカモール -

ハープ・ノートはロックマンをずっと見守っていた。

『ミソラ…もう十分よ…』

ハープが言った。

そしてハープ・ノートは立ち上がり、背を向けた。

「バイバイスバル…。」

ハープ・ノートが立ち去ろうとした時、

「ミソラ！」

ハープ・ノートは振り返った。

そこにはハープ・ノートが一番会いたかった人が立っていた。

「ただいまミソラ！」

そう、ロックマンことスバルだった。

「スバル！」

二人は電波変換を解き、ミソラはスバルに抱きついた。

「スバルのバカ！心配したじゃない！」

ミソラはスバルの胸で泣いていた。

スバルはミソラの頭を撫でて優しく抱きしめた。

「心配かけてごめんねミソラ…。」

しばらくそのまましていた。

「さあ行くよミソラ！」

「うん！」

そうして二人は電波変換してWAXAへ向かった。

つづく

助けに来た

- WAXA -

「ロックオンソード！」

『無駄だ！』

「ロケットナックル！」

『エレキソード！』

『効かん！』

アシッドエースとジェミニの攻撃を軽々かわした。

その電波体は赤いキグナスだった。

「くそ！メガキャノン！」

エグゼが放つが、キグナスが回転して防ぎ、

『フェザーバルカン!』

「うわぁーーーー!」

逆にエグゼがくらった。

「熱斗!」

ロールがエグゼに駆けよった。

「フェザーショット!」

キグナスが羽を撃って来た。

当然無防備のロールは攻撃をくらっ…はずだったが、

「ダークバルカン!」

紫のバルカンに打ち消された。

「この声は……」

「まさか……」

みんなが驚いていた。

すると二人の電波体が現れた。

「やあ、みんな！」

ロックマンとハープ・ノートだった。

喜びの雰囲気の中、

「喜ぶのはまだだ！」

暁が言った。

するとロックマンは攻撃した。

「ダークスラッシャ！」

闇の剣で切った。

しかしロックマンは攻撃を止めない。

「ダークバルカン、シャドウレーザーミサイル、シャドウキャノン、ダークバスター！」

合計四つの攻撃を全て受け、弱っていた。

「これで最後だ！」

ロックマンはキグナスにバスターを向けた。

「ダークチャージショット！」

そしてキグナスは消え去った。

するとみんなは電波変換を解いた。

そしてWAXAへ入った。

つづく

重大なお知らせ

皆さんいつもこの小説を読んで下さりありがとうございます！

さて、今日は皆さんに重要なお知らせをします。

この、流星のロックマン4 - 絆 - の続編を執筆します。（絶対に）

タイトルは…

流星のロックマン - スクールライフ -

です。

この小説はスバルとミソラの恋愛がメインです。バトルも少しあります。

流星のロックマン - スクールライフ - は流星のロックマン4 - 絆 - が完結すると始まります。

期待して下さい。

そして、流星のロックマン4 - 絆 - もクライマックス間近です。

果たしてスバル達は新生・WWWの野望を打ち砕く事はできるのでしょうか！

期待して下さい。

作戦発表

- WAXA司令室 -

そこにはみんな集まっていた。

すると暁が入って来た。

みんなは話を止めた。

暁は画面の前で止まり、振り返った。

「今日はみんなに話がある。が、その前にスバル、ダークファイナライズは何回もして大丈夫か。」

「はい、でも暴走はするかもしれないけど。」

この言葉に少し安心し、暁は続けた。

「明日、遊撃隊のメンバー全員基地に乗り込むぞ!」

これには全員驚いた。

「暁さん、明日ですか？」

「ああ、明日だ！」

スバルの質問に普通に答える暁。

「では作戦を言う！ライトによると防犯プログラムが三つあってそれを破壊しないと最深部にいけないらしい。そこで三つに分ける。」

そして三つのグループに分けられた。

チーム：スバル、ミソラ、熱斗、メール

チーム…暁、クインティア、ジャック、ベガ

チーム…ツカサ、ライト、剣太、翔理

の三つのチームだ。

「今日は解散！明日に備えて休め！」

そう言ってみんなは解散した。

- 基地 -

「これで起動できる…起動する日は…」

明日の正午だ！」

電波テクノロジー破壊まで刻一刻と迫っていた。

つづく

作戦発表（後書き）

短かつ！最近塾が忙しくてしばらく更新が夜になります。感想待ってます！

ロックマンそれぞれの約束

- スバルの家 -

スバル達は茜に明日の事を伝えた。

「そう…でもあなたが決めたなら文句は言わないわ。あなたが無事でさえいればそれでいい。」

スバル達は少し安心した。

そしてベガと翔理はリビングでテレビを観ると言ったのでベガと翔理以外それぞれ部屋に行った。

- 熱斗の部屋 -

熱斗とメイルは布団に隣同士で横になっていた。

「ねえ熱斗。」

「なんだメール？」

メールが不安そうに聞いた。

「明日基地に行くけど、私達死なないよね。」

「当たり前だ！メールやみんなの為に絶対死なない！」

熱斗は断言した。

「ほんとに死なないでね…私、熱斗が死んだら生きていけないよ！」

泣きながら言った。

すると熱斗はメールを優しく抱きしめた。

「安心しろメール、俺は絶対に死なない…約束する！」

「熱斗……うん！約束だよ！」

メールも抱き返した。

- スバルの部屋 -

時は同じく、スバルとミソラはベットに横になっていた。

「いよいよ明日か…なんか緊張するねミソラ…」

「うん…」

「ミソラ？」

明らかにミソラの様子がおかしかった。

スバルは聞いた。

「どうしたのミソラ？様子が変だよ。」

するとミソラは泣き出した。

「明日、もしかしたら私達死ぬかもしれない…私はスバルが死ぬのは嫌だよ！」

「ミソラ…」

「私…スバルが死んだら生きていけないよ！」

するとスバルはミソラを優しく抱きしめ、頭を撫でた。

「大丈夫…僕は何があっても死なない！だからミソラも死なないでね…」

そう言ってスバルはさらに強く抱きしめた。

「スバル…わかった、約束だよ！」

そう言って抱き返した。

こうしてそれぞれは約束した。

何があっても死なないと…

つづく

ロックマンそれぞれの約束（後書き）

次回は乗り込む準備の話です。感想待ってます！

準備

- 富士山樹海前 -

そこには遊撃隊のメンバーが集まっていた。

「ではさっそく基地に向かう。だがWAXAが準備できていないので十分間休憩する！」

「暁さん、何を準備するの？」

スバルが聞いた。

「ああ、最終兵器だ。」

「へ、へー。」

最終兵器という言葉に疑問を抱いたが、考えるのを止めた。

「スバル」

「ミソラ！どうしたの？」

ミソラはスバルのハンターを指して答えた。

「メールが来てるよ」

「あつ！ホントだ、ありがとう。」

そしてスバルはハンターを見た。

メールは委員長からだった。

「スバル君、今日基地に乗り込むんだって？なんで言わなかったの！」

まあいいわ！でもこれだけは約束して！これは私とゴン太とキザマ
口からもよ！

絶対に生きて帰ってきなさい！

もし帰って来なかったらただじゃ済まさないわよ！ -

メールを読み終えてスバルは返信のメールを書いていた。

・委員長、ゴン太、キザマロ、心配してくれてありがとう。

僕は必ず生きて帰る！

ゴン太とキザマロに伝えておいて。
・

そして送信した。

「おい、出発するぞ！全員電波変換して行くぞ！」

そしてそれぞれ電波変換していた。

「電波変換！」

スバルも電波変換した。

「よし、出発！」

全員歩き始めた。

「（僕はこの戦い勝つ！そしてみんなで帰るんだ！）」

そう強く思うスバルだった。

つづくおはよう、ウォーロック」

そして、着替えにいった。「（やけにすんなり起きるな……）」
そう思うウォーロックだった。

そして、スバルについて行くように階段を降りた。

スバルがイスに座ると、ウォーロックが聞いた。

『一体どうしやがったんだスバル？やけに嬉しそうだな』
「今日は転校生が来るらしいよ！しかも3人だよ！」

スバルは嬉しそうに言った。そして、

「行つて来ます！」

と言つて扉を開けた。すると、

「「「おはよう（ございます）、スバル（君）」「」「おはようみんな」

ルナ、キザマロ、ゴン太が挨拶した。

「さ、早く学校へ行つて転校生を迎える準備をするわよ！」

そう言つてスバル達は学校へ行つた。

・ウェーブロード・

そこにはギターを背負つた女の子の電波体がいた。

「久しぶりだねスバル君！また会えてうれしいよ！しかし驚くだろうなースバル君」

スバルを見ながら言った。さらに、その子は学校へ行つた。

U
U
U
U

準備（後書き）

次回は基地に乗り込んで チームの話です。感想待ってます！

プログラム破壊 - ペガサス -

- 基地 -

「ここが…基地…」

スバルが驚くのも無理はない。

「基地って言うより要塞みたい。」

ミソラが言った通り、基地と言うより要塞だ。

「よし、入るぞ！」

暁が言い、みんなは中に入った。

- 基地内 -

一本の長い廊下があり、その先には一つの扉があった。

そして扉の上には三つの機械があった。

「ではこれより作戦開始！」

そしてそれぞれチームごとに機械へサイバーインした。

- 左の機械の電腦 -

左の機械の電腦には チームが入っていた。

「さっさと終わらせようぜ！」

「コントロールパネルはあそこよ！」

「スピード上げるわよ！」

「ウイルスに気をつけて！」

熱斗、メール、ミソラ、スバルの順で言った。

- 数分後 -

四人は着いていた。

「よし、壊すよ！」

ロックマンがロックバスターを撃とうとした時、

『プログラムを破壊せん！』

声がした。

「どこだ！」

『スバル！上だ！』

ウォーロックに言われ、四人は上を向いた。

すると上から電波体攻撃して来た。

「バリア！」

「エアースチール！」

四人は避けた。

「お前は…ペガサス！」

そこには黒い体のペガサスがいた。

『フリーズショット!』

ペガサスは氷の塊を無数に放った。

「オーラ、エレキソード!」

ロックマンはオーラを張り、ペガサスの弱点の電気属性のソードで攻撃した。

『無駄だ!』

ペガサスは避けた。

「サンダーショックノート!」

ハープ・ノートの雷の音符がペガサスに当たった。

『こんな攻撃効かん!』

ペガサスは怯まなかった。

「それはどうかな!メガキャノン!」

エグゼが放つ。

「アイスシールド、フリーズブレイカー！」

ペガサスは氷の盾で防ぎ、氷の光線を放った。

「うわぁーーーー！」

エグゼはくらった。

「リカバリースプレッド！」

ロールの回復する銃をエグゼに当て、エグゼは回復した。

「サンキュー、メール！スバル行くぞ！エリアスチール、エレキソード！」

「うん！エレキソード！」

二人はペガサスに向かって切ろうとした。

『こんな物！』

ペガサスは避けようとするが、

「アイズステージ！」

「バブルフック！」

ロールとハーブ・ノートの攻撃で、ペガサスは凍ってしまった。

「ダブルロックマンソード！」

二人のロックマンはクロスするようにペガサスを切った。

『ぐはっ！』

ペガサスはデリートされた。

「チャージショット」

ロックマンの攻撃でプログラムを破壊した。

「よし、戻ろう!」

そうして一つのプログラムを破壊した。

つづく

プログラム破壊 - ペガサス - (後書き)

大晦日と元旦は更新出来ません！

それでは皆さん良いお年を！！

プログラム破壊・ドラゴン・

- 真ん中の機械の電脳 -

そこには チームのアシッドエース、クイーン、ジャック、メテオがいた。

「よし、行くぞ!」

「「おお!」!」

「あれ、クインティアどうした?」

クインティアは座っていた。

「足を挫いた。」

「何やってんだよ!仕方ない、おぶってやるよ!」

そう言いアシッドエースはクインティアをおぶった。

「あ……ありがとう……」

顔を赤くしながらも嬉しそうなクインティアだった。

- コントロールパネル -

四人は着いた。

「よし、壊すぜ！」

ジャックが壊そうとすると、前に緑の光が現れた。

『お前達にプログラムを破壊させん！』

それは黒い体のドラゴンだった。

「ならお前を倒すまでだ！」

アシッドエースは言い、攻撃した。

「ロックオンソード！」

そして後続くように残りも攻撃した。

「ペインフレイム！」

「ファイヤーシューティングメテオ！」

「ハイドロドラゴン！」

攻撃は全て的中した。

『ぐはっ！なかなかやるな！なら最強の技を見せてやる！エレメンタルサイクロン！』

ドラゴンは回転して葉っぱを巻き上げ、竜巻を起こし、四人の方へ向かった。

「ジャックとメテオは炎系の技を放て！俺とクインティアはその後に攻撃する！」

ジャックとメテオは竜巻の方を向き、技を放った。

「ペインフレイム！」

「ファイヤーシューティングメテオ！」

当然、無防備のドラゴンは当たった。

『ぐはっ！しかしこれぐらいでは死なん！』

竜巻は更に炎を巻き上げ、攻撃して来た。

「これでもくらえ！ハイドロドラゴン！」

クイーンは水の攻撃を放ち、ドラゴンは当たった。

『ぐっ！』

竜巻が消え、姿が現れた。

「これで最後だ！ウィングブレード！」

アシッドエースは突進し、ドラゴンに当たった。

『くそ!』

ドラゴンはデリートされた。

アシッドエースはそのままコントロールパネルに当たり、プログラ
ムを破壊した。

「よし、任務完了! 戻るぞ!」

そして四人はサイバリアウトした。

つづく

プログラム破壊・ドラゴン・（後書き）

明けましておめでとございます！今年も僕の小説を宜しく願います！

プログラム破壊・レオ・そして新しいカップル

・右の機械の電脳・

そこには#チームのツカサ、ライト、剣太、翔理がいた。

『ツカサ！早くプログラム破壊しようぜ！』

「待つてヒカル！個人の行動は危険だよ！」

『大丈夫だつて！』

ヒカルが一人で行こうとすると、足下が凍った。

『なんだこれは！』

「言う事を聞かないから。」

ライトはそう言い、ヒカルを無視して先へ行つた。

「ライトにあまり逆らわない事だな。」

剣太はそう言い、ライトの後を付いて行った。

「ほら、ヒカル！僕達も行くよ！」

ツカサはヒカルを助けて、付いて行った。

『俺なんか扱い酷いような？』

ヒカルも付いて行った。

- コントロールパネル -

四人は着いた。

さっそくヒカルは破壊しようとする、翔理が止めた。

「待って下さい！罨かもしれません。」

翔理はそう言い、コントロールパネルに向かってキャノンを撃った。

『アンガーファイア！』

火の玉に消され、姿を現した。

それは黒いレオだった。

『破壊させん！』

「ならあなたを倒す！」

ライトは氷の光線を放った。

レオは避けたが、

「「エレキソード！」」

剣太と翔理の攻撃により、レオは麻痺した。

『くっ！動けん！』

ライトはその隙を見逃さず、攻撃しようとした。

『かかったな！アトミックブレイザー！』

レオは炎の光線を放った。

「しまった！」

ライトは攻撃を受けそうになった。しかし、前に二体の電波体が現れた。

「『ジェミニサンダー！』」

アトミックブレイザーとジェミニサンダーが衝突した。

「ライト！早く逃げて！」

ツカサに言われ、少し驚いた。

「今呼び捨てで…」

「いいから逃げて！」

ライトは赤くなるが、すぐ目付きを変え、

「いや、私も戦う！マジックフリーズショット！」

するとレオは凍った。

「今よ！」

「ありがとうライト！」

ジェミニは威力を強め、レオデリートした。

そしてプログラムを破壊した。

「みんな！先にサイバーアウトして、ライトと話があるんだ。」

そしてライト以外サイバーアウトした。

「で、話って何？」

赤くなりながらも、聞いたライト。

「実は君の事が好きなんだ。だからこんな僕だけど付き合っ
て下さ
い。」

ライトは少し考え、顔を赤くして答えた。

「こちらこそお願いします。」

するとツカサは笑顔になって言った。

「ありがとう。」

そしてサイバーアウトした。

つづく

休憩

- 廊下 -

三つのチームはほぼ同時にサイバーアウトした。

「おつ、三チーム終わったみたいだな！」

みんなうなずいた。

するとミソラが聞いた。

「クインティアさん何か顔赤いけど何かあったんですか？」

「なっ、何もないわよ！そっいえばライトちゃんも嬉しそうね。」

クインティアはとても動揺して、ライトの方へ話を逸らした。

『ツカサがライトに告白してライトはいいよって返事したんだよ！』

「「ヒカル!!」」

ヒカルが言い、ツカサとライトは顔を赤くした。

「ツカサもやるな!じゃあ俺もクインティアに…」

ゴンッ!

クインティアは杖で殴った。

「今は敵のアジトだし人前で変な事言わない!」

暁はクインティアに怒られ凹んだ。

「じゃあ今から乗り込むぞ…」

暁は凹んだまま扉を開け、入った。

皆も続いて入った。

その頃奥の部屋ではルーシが作業していた。

「これで最終検査は終了。後は私が……………するだけだ……。」

こちらも着々と準備が進んでいた。

つづく

休憩（後書き）

今回は作者の都合上短くなりました。

今思うと五十話突破してるんですね。

次回はついにルーシと対面します！果たしてルーシの真の目的は？
ご期待下さい。

ちなみにあとこの小説は残り十話あるかないかです。

長くなりましたが次回ご期待下さい。（しっこ！）

真の目的

- 奥の部屋 -

みんなはそろそろ部屋に入った。

「なんだこの部屋は…」

「気色わりい！」

暁とジャックが言う通り、部屋のあちこちに機械が置いていて、天井に向かって太い管が何本も繋がっていた。

「なあ暁、あれがもしかして電波テクノロジー破壊装置？」

皆が一斉に物体に注目した。

「その通り！それが私の最高傑作、ダーク・ネビュラ・シャドウだ！」

するとダーク・ネビュラ・シャドウの目が光り、パイプが外れた。

『スバル、これはかなりやべえぞ…』

『ええ、かなり強力な電波よ…』

『それだけじゃねえ、こいつの中にたくさんの電波体がいるぜツカサ…』

『しかもアンドロメダやラム、アポロンとシリウスの反応もあります。』

ウィザード達は驚いていた。

『でもなんで電波テクノロジーを破壊するんだ!』

スバルが聞いた。

『何故だと!ふざけるな!原因はお前達人間だろ!』

「原因は人間だと！何故だ！それにお前も人間だろ！」

暁が叫んだ。するとルーシは笑いながら言った。

「お前達人間がくだらん事をして何度も地球が危機にさらされただろ！だから私はダーク・ネビュラ・シャドウを使い地球をリセットする！」

皆は驚きを隠せなかった。

ルーシは続けた。

「それに私は電波体だ！」

これには特に驚いた。

「ま…まさかお前アレをするんじゃない…」

ルーシはニンマリした。

「そう…私とダーク・ネビュラ・シャドウとシンクロする！」

暁以外分からなかった。

「暁さん、シンクロって？」

スバルが聞いた。すると暁は震えた声で言った。

「シ…シンクロとは電波体同士で周波数を強制的に合わせ、融合する事だ…シンクロすると力は二倍になる。」

驚いているが、ウォーロックは平然として言った。

『でも弱点はあるぜ！』

「えっ！」

ウォーロックは続けた。

『周波数を強制的に合わせると、それだけ体に負担がかかる。だからシンクロできるのはせいぜい五分だ。』

「なら五分だけ耐えたらいいんだね。」

ダーク・ネビュラ・シャドウとサテラポリス、決戦の火蓋は落とされた。

つづく

真の目的（後書き）

どうでしたか？

さてみなさんにお知らせがあります。

勝手ですが、次回の更新は2月1日になります。

1月は多くの用事が重なり、更新できても短い物になります。それではみなさんは満足しないと思うので、2月1日にいつもより少し長くします！なので期待して下さい。

しばらく更新はありませんが、この小説を宜しく願います。

では2月1日に！

囀（前書き）

みなさん、久しぶりです。時間が空いたので短いですが投稿しました。どうぞ！

囧

部屋の中では両者攻防が続いていた。

「ダークバルカン！」

「ライトエコー！」

「稲妻落とし！」

「フェニックスフェザー！」

「ウィングブレード！」

ファイナライズしているメンバーは攻撃を放つがダーク・ネビュラ・シャドウには当たるが全く効いていない。

その後も皆は攻撃を続けるが、効かなかった。

『今度はこっちの番だ！デリートレーザー！』

ダーク・ネビュラ・シャドウは何本もレーザーを放った。

全員受けた。普通の電波体なら間違いなくデリートされていたが、
かろうじて耐えた。

すると熱斗とエグゼが何かを確信した。

そして遊撃隊のメンバーに教えた。

「みんな！あれは多分ドリームオーラだ！あれは一定の攻撃力以上
じゃないと効かない！」

これには皆驚いた。

『でも安心して！ドリームオーラは攻撃する瞬間消えるから！』

しかし沈黙は続いた。すると暁が喋った。

「つまり誰かが囷になれって事が…」

「私が囷になります。」

そう言ったのはライトだった。

暁は止めようとしたが、ライトの目は真剣そのものだった。

「わかった、いいだろう！」

そして遊撃隊は実行した。

つづく

囀（後書き）

どうでした？明日も投稿します！

万事休す

遊撃隊は通信機で叵作戦を確認していた。

「いいか、あいつは後三分程でシンクロが消える。だからそれまで目一杯攻撃するんだ！」

遊撃隊はそれぞれ散った。

「あなたの相手は私よ！」

ハデスが叫ぶと、案の定ダーク・ネビュラ・シャドウはハデスに攻撃した。

「今だ！」

ロックマンの掛け声で攻撃した。

すると当たった。

『なっ、何故だ！私の防御は計算上完璧なはずだ！』

自分がダメージを受けた事に驚くルーシ。それを更にロックマンは言い放つ。

「いくら計算してもそれが完璧だと限らない！何度も挑戦して絆の力で勝つんだ！」

すると突然ルーシは黙った。

『絆だと！ふざけるなあ————！！！！！！』

すると地面が揺れた。

『貴様ら全員抹殺してやる！！』

ダーク・ネビュラ・シャドウは手にビームをチャージし始めた。

「全員退散！」

『ぐっ！があ————！！！！！！』

突然ダーク・ネビュラ・シャドウが苦しみ始めた。

体が光ると、二つに分かれた。

「なっ、シンクロが終わった…。」

ル―シは震えていた。

そこにすかさずアシッドエースはルーシを確保した。

「ギヤア——！！！」

ダーク・ネビュラ・シャドウが奇妙な悲鳴をあげた。

ダーク・ネビュラ・シャドウの目は赤くなっていた。

「ついにダーク・ネビュラ・シャドウが暴走した…これで誰にも止められな…い…」

ルーシは気絶した。

するとダーク・ネビュラ・シャドウは腕を振った。

「うわっ！」

遊撃隊は吹っ飛び、壁にぶつかった。

ロックマンとエグゼ以外電波変換が強制的に解かれた。

「ぐっ！なんて強さだ…」

皆驚いていた。

なす術も無かった。

つづく

万事休す（後書き）

明日は更新出来ません。明後日更新します。感想待ってます！

シンクロ

遊撃隊は壊滅寸前だった。

ロックマンとエグゼ以外電波変換不可で体力も限界に近い。

そんな中スバルと熱斗は相談していた。そしてスバルは遊撃隊に言った。

「みんな…逃げてくれ…ここは僕と熱斗でシンクロする！」

しかしミソラとメールは反対した。

「いや！私もスバルと戦う！」

「そうよ熱斗！私も戦う！」

しかしスバルと熱斗は首を横に振った。

「「ウツ！」」

スバルはミソラに、熱斗はメイルに腹を強く殴った。

ミソラとメイルは気絶した。

「「ごめん……」」

スバルと熱斗は謝り、暁とクインティアに預け、スバルと熱斗以外逃げた。

「いくよ熱斗！二人で帰るんだ！」

「ああ、一緒に帰ろう！」

二人はうなずいた。

「「シンクロ！」」

二人はシンクロし、合体した。

「ロックマン・ダブルブルーソウル！」

つづく

シンクロ（後書き）

更新出来なくてすみません！明日は更新出来ません。感想待ってます！

ネバーギブアップ

部屋はロックマン対ダーク・ネビュラ・シャドウの戦闘中だった。

状況はシンクロしたロックマンが優勢だった。

しかしロックマンは焦っていた。

「（まずい…後一分でシンクロが終わってしまう…よし、これで決めよう！）」

するとロックマンはダーク・ネビュラ・シャドウの前に立った。

「行くぞ！ダーク・ネビュラ・シャドウ！」

ダブルロックマン・ブルーソウルスラッシュ！――

青い剣で切った。

それと同時に噴煙が上がった。

「「やったか？」」

噴煙が収まった。

「「なっ、何！！」」

ダーク・ネビュラ・シャドウはボロボロだが、かろうじて残っていた。

『デリートレーザー！』

レーザーはロックマンに当たり、吹き飛ばした。

そしてシンクロが解除された。

「シンクロが終わった…」

「まだまだ熱斗！僕達は帰るんだ！」

「ああ、そうだった！」

二人は立ち上がり、ダーク・ネビュラ・シャドウの所へ走った。

つづく

自爆プログラム

二人のロックマンはすでに疲労状態で倒れそうだった。

「熱斗…僕に考えがある…」

「なんだ？」

熱斗が聞いた。

するとスバルは熱斗の方を向き、言った。

「さよなら熱斗…ミソラにも言っというて！」

「なっ、何言っ…うっ！」

スバルは熱斗を蹴り飛ばし、熱斗は外へ吹っ飛んだ。

そしてスバルはあるプログラムを起動させた。

「ジバクプログラムサドウシマシタ、アトジュウビヨウデバクハツシマス。」

そしてロッキーマンはダーク・ネビュラ・シャドウの背中にしがみついた。

「うおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ドオオオオオオオン!!!!!!!!!!

基地が吹っ飛ぶほど威力は凄かった。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1565p/>

流星のロックマン4-絆-

2011年3月6日15時10分発行